

狂言

昭和三十三年一月一日発行
行所 名古屋市東区東山町1/1
名古風狂言共同社同人
井上承兵衛方 電話3177
名古風狂言共同社同人
井上承兵衛 印刷
株式会社 地上社 電話1196

一月の動き

一月五日 商工会議所
福ノ神 石田喜樹 佐藤友彦
井上義次
有徳な人二人、大社へ年越し参りをする所へ
福ノ神が出現して御酒を求め、兩人に福を授
ける。

品位の中にこめられた笑のしみとほつたセ
リフ、目出度い狂言の中に折込まれた福ノ神
の処世訓。
子供狂言として御祝儀に最も喜ばれる狂言
です。

一月十五日 清 韻 会
舞田村 シテ大西 三郎 井上松次郎
安藤原 シテ長屋 潤 佐藤卯三郎
狂言 昆布売 河村丘造 佐藤秀雄
貧乏大名、自身太刀を持つて外出、供にす
べき者を物色する所へ昆布売が通りかゝる。

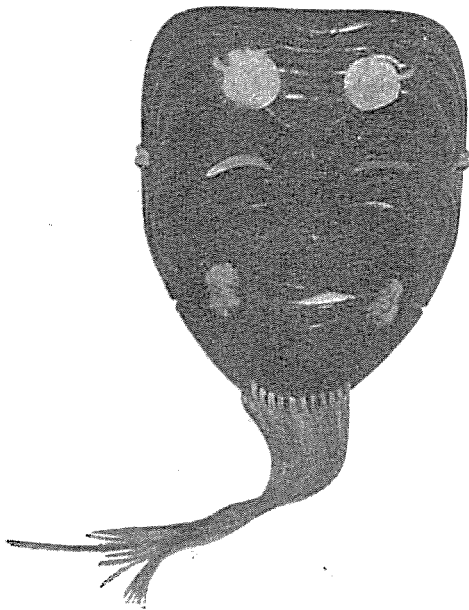
無理に供につれ太刀を持たせ道々昆布売をな
ぶる。腹をすえかねた昆布売は逆に大名をな
太刀でおどし、昆布を売らせ、太刀をとつて
逃げる。

下廻上の狂言として特に優れたもの、土農
工商の最低と最高を噛み合はせて、その対照
の妙となぶられる大名のおかし味を盛り上げ
る。威張つた大名の昆布を売らされる面白さ

一月二十日 能と狂言の会 学生能
不 須 (名) 中野針三郎 富田 章夫
左々木秀夫
不須とは毒菜の名称、外出する主人が留守番
の太郎冠者、次郎冠者に不須と云つて砂糖の
入物を預ける。兩人は退屈の余り不須の蓋を
開き砂糖を打つ。蓋を開けるまでの面白さを
為一芝居を打つ。蓋を開けるまでの面白さを
弁解の為にする悪戯の可笑味、中学教科書所
載の名作狂言です。

文 荷 (前山心) 広田 益也、松尾重康、
若松英治
小人に送る文の使を頼まれ、不承不承出掛る

賀 正



昭和三十三年元旦

狂言 共同社

太郎冠者次郎冠者が、文を伴、をで荷い誦い
乍ら行く、途中でフト文を開いて、兩人取り
合ふ内に之を破り、低松の風の便りと酒落る
辺り誠に風流味溢れる冠者達です。

一月二十七日 名匠鑑賞能 (第二十八回)
竹生島 田田 治郎 野村又三郎
道成寺 シテ金 剛 三宅藤九郎
夜討會我 シテ竹市秀雄 大原内三宅藤九郎
野村又三郎 保之
狂言 木六歌 三宅藤九郎 井上松次郎
太郎冠者が主の云付で木六歌炭六歌を牛の背
に、伯父御への進物の酒樽を自身で担げ、津

北野の御手洗参詣に出た主人と太郎冠者
見事な太刀を持つた奉公人をみかけ、間の抜
けた太郎冠者は主人の小刀を借りて彼の太刀
を奪らうとして却つて小刀を取り上げられる
之を取返す為、兩人で一度はとらえた奉公人
を、失敗を重ねた上、遂に主人を縛り、捕えた
奉公人を逃がすまでの可笑しさは云はぬが花
三人片輪 (前山心) 市橋幸男 大塚文雄
片輪者を抱えるの高札に集まつた、にせ片輪
三人が主人の留守に酒盛りを初め、呑めや歸
への大騒ぎの最中、戻つて来た主人、あわて
た三人が、それを取り違える可笑しさ、余
りにも有名な狂言です。

狂言は古風がよろこぶる
歌村彦 四郎
伝統芸術の狂言が、最近各方面から関心を
以て見られることは、誠に喜しいことであり
ます。

それにつけても、昨年「夕鶴」「東は東」
等の新様式による、能狂言風のものが演出さ
れましてより、今夏は終に裸のヌード能まで
飛び出して、私共は驚きに悪寒を覚えました
先日、朝日の「きのうきょう」欄の、吉村
公三郎氏の投稿の内に、刺身にマヨネーズか
けたのでは、刺身を食い度い人も、マヨネー
ズを好きな人も、共にいたゞきかねる、刺身
にはやっぱり、シヨニーとわさびがよろしい
と、ありました。私も全く同意感であります
茲に、和泉流宗家古本「狂言趣意之伝」より
一部原文のまゝ、抜萃して、昔の人の心がまへ
を偲び、古風な芸術を尊びたいと思ひます。

狂言趣意之伝
狂言作人、玄恵法印ノ、ツクラレタル、狂言
多ク、有ト見タリ、此僧ハ、後鳥羽院ノ御宇
ノ人也、軍中ノ慰ニ、狂言杯ヲ、作り、オク
ラレタル事ト、見タリ、又梅ノ尾ノ明恵上人
笠置ノ、解腕上人杯ノ、作ノ狂言、有ト見
タリ、此兩僧ハ、大方、玄恵ト、同時代也、
狂言ハ、此時代ノ、作意ナレバ、能ヨリハ、
古キ物ト、見タリ。

狂言

昭和32年2月1日発行
 発行所
 名古屋市中区東門前町1ノ1
 井上重兵衛方 電話3177
 名古屋狂言共 同社同人
 印刷所
 株式会社 地上社 電話1199

二月の動き

二月三日 清 風 社

能高 砂 シテ大塚 一二 岡山本光次郎

狂言 倉弟 井上義次 井上松次郎 佐藤友彦

兄から舎弟と云はれてもその意味のわからぬ弟が人に聞いてみる。その人が「舎弟とは、人の物を案内なかたつてくる事」と教えたためさあ大変、兄弟嫌嫌の花がさく。

二月十日 能楽倶楽部

能高 砂 シテ水藤 又吉 井上松次郎

清 経 阿部長太郎

熊 野 戸田和子

蟬 丸 横山篤太郎 岡佐藤卯三郎

小銀治 伏原愛子 岡河村丘造

狂言いろは 石田喜樹 井上松次郎

息子を寺へ手習に出さうとする親が、種々寺へ上げるについて教えている内に、先走りする息子の答えにいら立って、口移しでいろはを教える。その内に親の言葉まで真似る息子に、遂に腹を立てる。

狂言 成上り 井上礼之助 市橋幸男 佐藤秀雄

主と一緒以北野へお籠りした太郎冠者は、

持参した太刀を通行した横着物に青竹にすりかえられる。此失敗を何とか云ひくるめようと、山の芋が殿に成り上つた話を面白おかしくして太刀の事をコマカさうと種々苦心する。

二月十七日 観 世 会

能竹生嶋 シテ橋岡久太郎 岡佐藤卯三郎

雲雀山 シテ観世 元正 井上松次郎

望 月 シテ観世 喜之 岡野村又三郎

狂言 宝の槌 井上松次郎 野村又三郎 井上礼之助

宝くらべに験の有る宝を求めて来いと云はれた太郎冠者が都で、スツパに係り、木槌を逢来の島の打出の小槌と云ふて飛付けられる。

まんまとだまされた太郎冠者が主の前で、馬を出すとして小槌を振れども振れども出ぬ馬……困つた太郎冠者は如何に主の手前をとりなすか。

二月二十四日 壺 泉 会

能蟬 丸 岡佐藤秀雄

土 蜘蛛 岡歌村鴻一郎

狂言 文、山、賊 佐藤卯三郎 河村丘造

山賊二人、仕合せを仕損じ、お互に相手を、言ひつにつて組み打ちとなる。その内、話し

合つて置置きを残すこととなす。

「扱も扱も唯かぞめにぞ」出で、山賊を仕損じ、人の物をも得とらずして、結句どし〜口論し、引くなよ我ものがさじと、刀の柄に手をかくる。

「構えて構えて四辺の人々に、けなげに死にたると、語りつたえて給ふべし」

云々の文句に兩人共泣く。あげく、

「思へば無用の死なりと、二人の者は仲直り、さるにてもかしこあやまちしつろうと、手に手をとりて我宿に、犬死せでぞかへりける」

三番叟について

(古文書檢)

歌村彦四郎

三月には地元として、久し振りに柴田収氏の「翁」の披きがあります。共同社からも井上礼之助氏が三番叟を披きます。

この「翁」は、古くは「式三番」と呼ばれてゐました。天下泰平国士安穩の祈禱として、めでたく舞ふのが眼目であることは、御承知の通りであります。

普通の能と違ふのは、等量の重要性を持つ翁と三番叟が、一方は能役者、他方は狂言方が勤める、更に千歳は上掛では能役者、下掛では狂言方勤めることであります。

三番叟の舞は採(もみ)の段、翁の段の二つに分れ、前半の採は素面で軽快潑刺とした喜びの飛躍、後半の翁は面をつけ、翁を振つて狂言に舞ふのであります。

翁、千歳、三番叟については古来いろ〜と云ひ伝へもありますが、和泉流宗家伝「翁

式三番叟ノ秘書」より、原文のまゝ一部抜萃して御参考までに。

翁式三番叟ノ秘書

一、古事ハ天照大御神、天ノ石屋戸ヲタテ、サシコモリマシ〜シ時、八百万ノ神タチ、アツマラセタマヒ、イロ〜ト、大御神ノ御心ヲ、イサメント踏トドラカシ、神掛リシタマフ、マ子ビ也、是ハ神代ノ正語上卷(マサコトカミツマキ)天ノ石屋戸ノ、クダリニテトクト合点スベシ。

千歳ハ則、布刀玉命 (フトタマノミコト)

翁ハ則、天兒屋命 (アメノコヤ子ノミコト)

三番叟ハ則、天宇受売命 (アメノウズメノミコト)

惣役者ハ、則、諸神達ノ、マ子ビ也

脇師ハ則、天手力男神 (アメノタヂカラヲノミコト)

是ハ、天照大御神、天石屋戸ニ、コモラセ給時、御戸ノ脇ニ、カクレキ給ヒ、大御神、石屋戸ヨリ、由サセ給所ヲ、彼ノ手力男神、脇ニカクレ居給、御手ヲ取テ、引出シメ給フ、去ニヨツテ、脇ト称也、スベテ、脇、片脇ト云事、手力男神、脇ニ、カクレ居給ガ脇ト云事ノ、始也、式三番ノ内ニ、脇師、出ヌ意ハ、カクノゴトクノ、趣ナルニヨツテ、ワキニ、カクレ居給所也、脇ト称スル意ハ、カクノゴトクノ、説ヨシ

と脇の由来も書止めてあります。右につき高安流家元高安齋郎氏の談に脇が手力男命を現すと云ふ事は申伝えております脇師の次第に二目遣ひとて日月を指す型のあるのは即ち天の岩戸を引あげる意である由を伝えてゐる事を見れば確かにそうだと云へるでせう。云々

狂言のエロキューション

(メリハリ)

間狂言や、能がかりの狂言は、当然能の影響があつて、独得のエロキューションがあり、節のようなものがあり、普通の狂言の言葉と変つたメリハリを使つておられます。これはそうしないと、前後との調子があつかないから、そうするのですが、現今そうでない狂言にも、こんな傾向が多くなつて来たようです。

大体狂言は、全体として、口語の対話劇、即ち上演当時の民衆の生活に即した科白劇で、其時々必要により、自由に表現できたものと考えられます。そうだとすれば、現今の狂言のエロキューションの中にまで入りこんで来た、非常に能に似ている或る曲づけらしいものは、間狂言として能に從属するようになつてから、能の影響をうけて来たからの結果ではないかと思はれます。

狂言のセリフは成る可く「リアル」に言はねければならぬのは当然で、乱能に於ける能役者の狂言が、上手でありながら、素人臭くなるのは、セリフ廻しの発声法、即ち、イントネーションがどうしても語になりすぎることではないでせうか。能のセリフは、ヒラキが一つだけで、その前後は、ほぼ棒読みのように語る。ところが狂言では、それが「リアル」に云はれ、メリハリが全然違つて来るのです。能の人達には一寸真似の出来にくい所である、そこにこそ狂言のメリハリの味があるのです。この出来にくい独得のメリハリを、殊更、能がうりにしたりしてくずす事はどうかと思ふ次第です。

狂言は、口伝によつてのみ伝承されていゝる。メリハリは絶体にくずすべきではなく、あくまで狂言独得のメリハリを堅持すべきと思ふものであります。

見たまゝ聞いたまゝ

欄について

狂言の批評を書くのは誠に辛い。余り良い事斗り書けば提灯持ちのようであらう、けなせば叱られる。それで毎回毎に、走り回つて楽屋の声、見所の声を聞いて書きつけて行く考えですが、何より皆様の御投書により、改善、又研究の基礎を造りたいと存じます。

お叱り。御注文。御激励。何でも大歓迎致しますから、何によらず、御意見を御聞かせ下さるよう、お願い致します。

専門的な意見はどうしても少ない結果となると思ひますが、楽屋の意見は、もう少し型態のととのつたパンフレットになつてから、発表して行く考えです。
何より建設的な、御意見を御投稿下さるよう、お願い致します。

三月の予定

三月三日 名匠鑑賞能

能 清経 シテ宝生 英雄

隅田川 シテ宝生 九郎

土蜘蛛 シテ野口緑久

狂言 鶏算 井上義次

同 佐藤友彦
同 佐藤秀雄
同 石田嘉樹

同 井上松次郎
同 佐藤秀雄
同 佐藤卯三郎

三月十日 婦人能

熊郎 耶 シテ片岡道子 同 井上公代

熊野 荒井静枝 同 津村秀子

熊坂 倉本雅 同 佐藤卯三郎

狂言 曹算 井上松次郎 同 河村丘造
市橋幸男

三月十七日 淡交会

熊郎 耶 シテ観世元正 同 茂山喜三

隅田川 シテ橋岡久馬 同 平田常二

葵上 シテ橋岡久共 同 吉田清三

狂言 棒縛 茂山喜三 同 吉田清三

三月二十四日 掬水会

熊翁 柴田 収 千歳 同 佐藤岩雄
三番 同 井上礼之助
面箱 同 歌村瀧一郎

熊高 砂 シテ竹内 正 同 佐藤秀雄

熊半 藤 シテ山田 巖男 同 市橋幸男

熊俊 寛 シテ植村真太郎 同 佐藤卯三郎

熊安 彦原 シテ尾形 敵 同 井上松次郎

末 広 佐藤卯三郎 同 井上松次郎
山本光次郎

飛越 河村丘造 同 佐藤秀雄

〔特報〕

六月下旬に狂言の夕を開催致します。

- 1、蚊相撲
- 2、蝸牛
- 3、武悪
- 4、引くゝり等

他に狂言小舞敷番配役其他は追つて発表

同社

向天門
入紫微

西六

白龍

登録
商標

SHIMIZUCYO

白龍酒造株式会社

SHIMIZUCYO

NAGOYASHI

狂言

昭和32年3月1日発行
発行所
名古屋市中区東門前1/1
井上頂兵衛方 電話3177
名古屋狂言共同社同人
印刷所
株式会社 地上社 電話1196

三月の動き

三月三日 名匠鑑賞能

龍清 経 シテ宝生英雄

隅田川 シテ宝生九郎

土蜘蛛 シテ野口緑久

狂言 鶏 井上義次

三月十日 謳 調 会

熊野 シテ片岡道子 井上公代

熊野 シテ荒井静枝

熊野 シテ津村三子

熊野 シテ倉本 雅 佐藤卯三郎

熊野 シテ倉本 雅 市橋幸男

熊野 シテ倉本 雅 河村丘造

熊野 シテ倉本 雅 市橋幸男

熊野 シテ倉本 雅 市橋幸男

熊野 シテ倉本 雅 市橋幸男

熊野 シテ倉本 雅 市橋幸男

熊野 シテ倉本 雅 市橋幸男

熊野 シテ倉本 雅 市橋幸男

熊野 シテ倉本 雅 市橋幸男

熊野 シテ倉本 雅 市橋幸男

熊野 シテ倉本 雅 市橋幸男

熊野 シテ倉本 雅 市橋幸男

熊野 シテ倉本 雅 市橋幸男

熊野 シテ倉本 雅 市橋幸男

熊野 シテ倉本 雅 市橋幸男

熊野 シテ倉本 雅 市橋幸男

熊野 シテ倉本 雅 市橋幸男

熊野 シテ倉本 雅 市橋幸男

熊野 シテ倉本 雅 市橋幸男

三月十七日 淡 交 会

龍野 龍 龍野 龍

隅田川 シテ龍野 龍

葵上 シテ龍野 龍

狂言 棒縛 茂山喜三

三月二十四日 掬 水 会

熊高 砂 シテ竹内 正

半部 シテ山田 巖男

俊寛 シテ植村真太郎

安達原 シテ尾形 徹

末広 佐藤卯三郎

翁 柴田収

千歳 佐藤岩雄

三番叟 井上礼之助

面箱 歌村彦四郎

井上礼之助

井上礼之助

井上礼之助

井上礼之助

井上礼之助

井上礼之助

井上礼之助

井上礼之助

井上礼之助

井上礼之助

井上礼之助

井上礼之助

井上礼之助

井上礼之助

井上礼之助

(續)三番叟のついで

(古書検)

歌村彦四郎

翁、三番叟を勤むるは、神事に倣ひ、其の身を清浄にして勤むるものなれば、古来より別火と云つて、七日乃至三日間は、他人の手を借らず、自身にて炊飯をするを例とし、現在では中々至難なことであります。こゝに当日薬屋に於ける別火のありかたを宗家の秘伝書より抜萃す。

一、当日 薬屋一、一座、一統ノ、別火ノ清火ノ手当ハアレ共、夫ハ夫、其ノ外ニ、自分ノ火斗ニ、清火用意スベシ、此ノ子細ハ、一座、一統ノ内、清火、物忌中ノ、多少有ニヨツテ也、イツレ、前日ヨリカ、又、当日斗、清火人ハ有ベシ、ステニ、三番叟ノ後見ハ、当朝、別火サス也、右火ノ用意ハ、式三番スス迄ノ、湯茶ノ用意ノ事也、飯等ハ、宿元ヨリ持参スベシ。

又採の段の出の和歌、「おさへ〜お〜、飲びありや〜我が此のころより、外へはやらじとぞ、おもふ」と云ふことについて、一、初段ノ和歌「おさへ〜」ト云フ意ハ、おほさいはひト云事ヲ、ツメテ、おさへト云タル事也、大幸(オホサイイヒ)ノ意也。

ついでに翁のとう〜たり〜と唱ふに、ついでに、左のように書いておきます。

一、とう〜たり〜と唱ル事、とう〜ハ、貴(タツトク)ト云事ニテアルベシト也、

たり〜ハ、タリト云事ニ、らヲ付テ、云タ

ル事カト云説アリ、但、陀羅尼品ノ説モ、又ヨロシ、其ノ子細ハ、陀羅尼品ト云経ハ、経ノ中ニモ、格別貴キ、経ナルニヨツテ、とう〜たり〜トハ、貴キ、陀羅尼ト云意ニテアルベシト也、陀羅尼ヲ、たり〜ト清テ(スマテ)唱タル事カト也

以上のように、いろ〜と詮索(サク)したもので、何れが真かは、其の道の研究者に委ねます。

狂言一流の扇のつと

狂言二流の扇の寸法、及び模様は、左に

和 泉 流

一、骨の長さ 一尺五分 透し骨

一、地紙寸法 大代地

一、金銀五段引にて降り埋み、但し金三段、銀二段、右金の所に、銀泥の若松、銀の所に金泥の若松、総模様の絵、尤も松は根なしなり

一、近衛引、金銀無地なり、俗に近衛引と云ふ是は花子の狂言、御好の時、近衛殿下より拝領にて、以来定式として花子の時使用する、長さ老尺五分、透し入りにて、地紙は大代地なり

大 蔵 流

一、長さ老尺五分

一、若松に籠を引きたる物

舞合に用うる金地等は、老尺一寸位の物を使用す、花子の扇は金地に夕顔なり、寸尺も長く大形なれば骨二三本疊みて用ふるなり、

風流について

(古書検)

風流と云ふものは三番叟の済んだ後、又は翁唄りのすんでから三番叟の始まる前等に出るものであり、狂言にて、能の真似をするというふうなもので、中々雅味のあるものなると、近來とんと、之を行はなくなつたのは一子相伝なる故又役者が不足であるのと装束の揃はぬのが原因であらうが、誠に残念な事である。和泉流故山脇元清氏の談として「能楽」にのつた文に、次の様に記してあつた。

風流の事は、私の家が本元だそうです、大蔵流にもあるそうですが、元は私の家から伝へたものとみえまして、寛文十二年の

夫婿喧嘩をして父の家へ帰つた縁が、たへ御がつれに來ても絶体帰らぬと父の前ではつきり云ふので父は縁を興へかくして舞に逢ふ、舞は種々託言を云ふ、その内縁がたまりかねて顔を出し、兩人して父を倒して家へ歸る。父は祭に招ばぬぞと腹を立てる。

写と、浮き腰のねばり等が此の狂言のヤマと

夏という時に、狂言大夫大藏彌太郎虎時と記名の上、書判までした、神文誓紙が入つております。加州藩の御役者であつた三宅の家にも許してはありましたが、是は片風流と云いますか、若干略式のものでありませぬ、元來此風流と申すものは、禁裡御所か、徳川幕府か、西本願寺か、春日神社でなければ、出来ぬ事となつて居つたもので、大層やかましく申したものでした、風流の起源は、確實な事は、分りませんが、狂言等よりは古いものであつたといふことです。其主旨とする処は、少しも理屈張らず、唯目出度、賑かにするといふもので、昔は朝廷へ御調物を献上する時などに、やつたと申す事です、現在私の家に伝はつておりますものは十五ありますが、次の通りです。

- 1 御賀久松の風流
- 2 犀神の風流
- 3 蟻の風流
- 4 仙人の風流
- 5 藤橋の風流
- 6 四季神の風流
- 7 三盤の風流
- 8 千々尉の風流
- 9 大黒の風流
- 10 雀頭の風流
- 11 餅の風流
- 12 鶴龜の風流
- 13 しやうりやう地の風流
- 14 風風の風流
- 15 昆沙門の風流

この内①②③④は千歳掛り、外は皆三番曳掛りであります、元來風流は翁の中へ入るもので、其入り場所は翁掃りと云つて翁の舞も済み、翁が幕の内へ入つた所へ入れるのと、三番曳の採の段がすんで翁の段へ掛る所へ入れるのと、又全く三番曳の舞のすんだ後へ入れるものがあります、翁掃りが済んだ後へ入れる時は千歳の相手となつて問答をしますから千歳掛り、又三番曳の舞の中や其終りへ入れる時は三番曳が相手となりませぬから三番曳掛りと申すのであります。

此等の風流は、翁の謡の内の文句に因んで、其時々狂言方が作つたもので、唯一時其場所を目出度賑はすと、いふ主旨ですから、少しも理屈張つたものでなく、やかましく云ふべきものでありません、翁の謡の中に、ありとうたりと云ふことがあるからそれによつて賑が出て来たといふ様なことで、賑が出て、昔唐土から七曲りの環を送り、糸を通せ

といはれた時、蟻が之を通したが、其蟻は我なりと云へば、又蟻を守護する神靈が現はれて舞を舞ふと云ふ様な、誠に理屈も何も無いもので、終りはどれも謡となり、御世を寿ぎ、めでたし目出度しと云ふ事になつて居りませぬ。

中には三番曳と共に翁の段を相舞にするものもあります、昔はどこでもあるといふ歌にいかなくつたが、當時はどこでやつても差支えないのですから、一度やつてみたいと思つておりますが、難子方の都合もあつて、まだやる訳にはいきませぬ云々

和泉流の芸系

昨年六月発行の創元社版日本文学新書「狂言」に、大蔵流、茂山氏は狂言の型について最後にこう書いている。

「便宜上私が現に演じている「大蔵流茂山家の型」を中心に述べたことを許された。「茂山家の型」は、江戸末期の大蔵流家元の芸系を伝えていけるもので、現在関西以西に行はれている。この他東京を中心に「和泉流野村又三郎家」「同三宅家」「大蔵流山本家」。名古屋に「和泉流山脇家（宗家）」の芸系があることを附記しておく。（原文のまま）

御承知の通り、宗家山脇和泉の芸系は、名古屋にのみ残つてゐることは、此文章の表はす通りであり、共同社に所蔵される貴重な文献も、又古文書も皆之を裏書するものであります。

私達も山脇家の芸系と云ふ事については、相当の自信を持ち、これこそ正統だと云ふ心で當つて来て居るものですが、もつと慎重な態度で此貴重な伝統を守らねばならぬと、今更覚悟を新たに居ります。若し世代の人々には理解し難いかもしれませぬが、正規の和泉流の型と、メリハリを、厳然と乱さぬように守つて、宗家伝来の和泉流の狂言の発展を計りたいと念願しております。

和歌藻汐草 ①

今後共に御支援の程祈り上げます。いろは四十 を頭に詠んだ和歌能、舞に

殊に有益だと存じますので、こゝに、

一声の謡の中に二字引くは 喜多 古能
昭君ばかり外にこれなし
ろくに居る体は崩るものなれば 同 人
こゝろ用いてよく守れ入
橋掛り入るに心の怠りて 同 人
体崩るゝに用心をせよ
似せ芸は寸分写し写せども 同 人
功を積まねば翠柱に膠
方角は四方正面ある中に 宝生 将監
後正面殊に大事よ (以下次号)

四月の豫告

- 四月六日(土) 金 春 会
 - 御景 清 シテ校間 河川
 - 徳道成寺 シテ本田 秀男
- 四月十四日 観 世 会
 - 御自然居士 シテ山九郎右三門 井上松次郎
 - 徳源氏供養 シテ杉浦 義朗 井上松次郎
 - 鶴 銅 シテ大槻 十三 井上松次郎
- 四月二十一日 観 正 会
 - 御教 盛 シテ松井 省吾 井上光次郎
 - 鞍馬天狗 シテ久田 秀雄 井上礼之助
- 四月二十八日 狂言 倉第 井上 義次 佐藤 友彦
 - 御蝶 丸 シテ大塚 一三 井上松次郎
 - 御鶴 銅 シテ金剛 一三 井上松次郎
- 六月の狂言の夕について
 六月二十一日午後六時より、涼風青葉を渡る熱田神宮神苑能楽殿にて左の番組により狂言の夕が催されます。
 蝸牛、蚊相撲、武悪、引織り、の四番役付及其他詳細は決定次第発表 ます。

達用御用品工場ゆる汎
商店 藤水 機械工具商
 番 1 1 2 7 1 4 2 1 電話 熱田神戸町
 盤旋罐製金銀スプレ
製作所 スイウトウ 工業 鉄
 番 1 3 8 0 電話 瑞穂区熱田東町神明前

狂言

昭和32年4月1日発行
発行所
名古屋市中区東門前町1/1
井上重兵衛方 電話3177
名古屋狂言共闘社同人
印刷所
株式会社 地上社 電話1198

四月の動き

四月六日(土)金 春 会

能景 清 シテ桜間道雄
兼道成寺 シテ本田秀男 井上松次郎
狂言 墨塗 佐藤卯三郎 河村丘造
佐藤秀雄

隠れもない大名、訴訟ごとくかかない国許へ下ろし、太郎冠者とさる恨みがまし、女のもとへ暇請いに出かける、女は見限られたと思つた男の訪れに喜んで迎えるが、暇請いと聞いて別れを惜しむ態にて水入の水を目に塗つて泣くまねをする見付けた太郎冠者が一策を案じ水を墨ととりかえる、泣く度びに黒くなる女の顔を見て肝をつぶした主は女に形見として鏡を与える、鏡をみた女の恐りは男たちの顔に墨をつけて追入りとなる、心持と動きのよく出た可笑味の多い曲で「狂言不審紙」では「宇治大納言物語にみえ」てありとあり「物語りの男の話を女に作り変えし事作者功なるべし」と言つてゐる。

四月十四日 観 世 会

能自然居士 シテ片山九郎右衛門 井上松次郎
源氏供養 シテ杉浦義朗
天 鼓 シテ大槻十三 佐藤秀雄

狂言 入間川 河村丘造 井上松次郎

入間言葉を趣向に立てた狂言で、東国大名は、何事も逆言に言入間言葉によつて、川向の何某にたぶらかされ、笑い、小袖、上下、太刀刀、扇までも取られるが、何某がうっかり本気で「身に余つて忝うござる」と、口をすべらしたのをとらえて、「入間様ならば忝くないと云ふ事であらうこちらはおござしめ」と取返す、相当複雑な曲柄であるが、言葉のやりとりの面白さが主眼となつてゐる。

四月二十一日 観 正 会

能教 盛 シテ松井省吾 山本光次郎
鞍馬天狗 シテ久田秀雄 井上松次郎

狂言 倉弟 井上義次 佐藤友彦

兄から倉弟と云はれるのが、どうしてもわからぬ弟が、人に聞いてみると、その人は「倉弟とは人の物を案内なしかつてくる事」となぶつて教えたため、さあ大変、「天目倉弟」とか「まだら倉弟」とか前代未聞の倉弟がとび出して、喧嘩の花が咲く。

四月二十八日 中部金剛会

能蟬 丸 シテ大塚一二 佐藤秀雄
鶴 銅 金剛 殿

早装束

狂言 鬼瓦 佐藤卯三郎 河村丘造
遠国大名、帰郷のお礼参りに参詣して、破風の上の鬼瓦をみて、「誰やらにやう似た顔ぢやが」と暫く案じていたが、「国許の女共にそのまゝぢや」と泣き出す、太郎冠者に帰郷すればすぐお目にかけますと云はれて、兩人笑留にして終る。十数分を出ない寸劇ですが、完全に笑劇を脱して喜劇となつており人間愛情の真実を鋭く表現した皮肉に満ちた短篇小説の味をもつてゐる優れた狂言です。

四月二十九日 淡 交 会

能田 村 シテ柴田初太郎 富田章夫
豊雲林院 シテ岡田頼允 佐藤秀雄

狂言 船ふな

主、太郎冠者を連れて遊山の途中神崎の渡に至る、渡し舟を呼べと云はれた太郎冠者へ「ふなやーい」と呼ぶので主は舟と呼べと云へ

ば、古歌を引いてふなが正し、云ひ張る、主は、一ほのほのと明石の浦の朝霧に島隠れ行く舟をしぞ思ふの一首の歌で、舟と云ひ張り、遂に謡にあるとて、「山田矢走の渡し舟の」云々の謡を出すのが舟もこがれ出づらん、の次句ふな人もこがれいづらんの文句で馬脚を現はす、利巧で達者な太郎冠者に愚鈍な主を配しての面白味は又格別であります。当日の出演者は先般能と狂言の会に出演された大学生諸君で熱演を期待しております。

つまりなかつた狂言?

歌村彦 四郎

昨年、月刊誌「文学」和泉流狂言、鉢叩、花子、三人片輪、の三番を見て、ふだんあまり狂言を見ておられない学生を主に三十人からアンケートした答へに、殆ど面白かつたと言つた内に、二、三人つまりなかつたとの答へがありました、その一つに大野晋(学習院大学助教)が、

一、つまりなかつた。
二、喜劇は、本質的には、軽い諷刺と機智とに富んで、幸福な感じを与えるものではないでしようか。しかし、狂言は全体の動作や発音が、現在では遅く重なるしく、悲劇が起りそうな感じがします。あの調子は悲劇に向いてゐるようです。それに伴奏音楽の楽しさや、合唱のよろこびが欠けているのも、独立した演劇として大きい弱点と思ひます。やはり狂言は能の合間に演じるものではないでせうか。
三、比較的面白かつたのは花子です。一番つまらなかつたのは鉢叩き。
四、鉢叩は動きもストーリーも、鐘や鉢を叩くリズムも単調で平凡で面白くなかつた。花子は面白い筋だけれども、狂言小歌を秘曲にしたりの、これを大曲だとしてたりすることと自身が、反響劇的なことと感します。三人片輪のようなドタバタ劇を、古典劇としてわざ／＼見るのは、演劇史の一つの標本としてあるに止るのではないでしようか。

以上であります、これは狂言を一般の喜劇か笑劇程度に見た、あさはかな考へであります。

「生きてゐる」とは

狂言の詞章は、伝書が定着した近世に於て、変改がなされてゐると、学者は云つてゐるが、種々の詞に室町時代末期の香りが感じられる、それでいて尙舞台で語られた場合、現代の人々にもピンと来る生々しさがあるのは何故だらう、音量、音質、抑揚といった舞台の上のせりふの技術によるのは勿論であるが、言葉自体についても其地位身分を示す品位と格式、其時々心理と其人物の性格までも鮮かにする、生きてゐる言葉であるからではないか。

例えば「ござる」と「です」は語感が全然違つて来る。「ござる」は丁寧で、品位があり「です」は簡約でやゝ品位も落ちる、くだけた親近感を表はすのは「です」でなければならず、「ござる」は矢張り格式も上であるはずである、主に対する太郎冠者は「ござる」を使い、「です」を使ふのは大名自体のせりふ、それもくだけた場合に限つてゐるようである、脇狂言等には使はれない、能の言葉に多い候言葉は、格式の高い武家の上層語で、庶民的な狂言には既に現はれて来ない、格調の高い脇狂言にも、全然出て来ない、舞狂言と称する能まがいの狂言のみに出て来るが之は能と同一調子をとつての事、只間狂言の場合には能と調子を違ふ、即ちシテ或はワキに対する場合に限つて使ふので、独りて普通の言葉となり、候言葉は使はない、こゝに狂言言葉の庶民的な自由さがあるのだ、中には特殊の場合、例えば安宅の能力と開付の対話の如きは、候言葉で応対するか、之は

当然能の一部であるので、此場合でも関付の「昨日も三人切つてのけたわ」、の如く興奮した場合に於いて候言葉で無い言葉が飛び出すし、能力でも関の容態を見に行くときは、候言葉を使はない、鉢ノ木の従者が二階堂に云付けられて、破れた鎧を着た武士を探しに出る場合でも独り言は候言葉ではない、こうして見ると、対人関係に於ける地位身分を明かにし、その時の心境性格までも鮮かに浮彫りさせるためには、候言葉では到底無理で、情景描写が六ヶ敷い、矢張り日常口語でなければ出来ぬわけである。

狂言の言葉が日常の卑語、俗語を、格法を守つて、又敬語を充分使い分けて、自由自在に馳使することによつて、その身分や地位、性格までも明らかにし、又長短を交えた語氣によつて、心理の動きを表現し、機知皮肉をほめかすことによつて、より生き生きとしたものとなるのではないだらうか。

正に作者の氣持が言葉にだけこんでいるからこそ、室町時代末期の庶民語の、「いこう重い」、「ていと」、「おんでもない」、「中々」、「おりやる」、「おりない」、「わこりよ」、「頼ふだ者」、「目に物を見する」等々の言葉が、昔の香りをそのままいでいて、尚舞台へ上れば、現代人にもピンと来る生々しさがあるのではないだらうか。

(特報)六月二十一日午後六時

狂言の夕

蝸牛	井上松次郎
蚊相撲	佐藤卯三郎
武悪	河村丘造
引締	歌村彦四郎
	市橋幸一郎
	井上礼之助
	井上松次郎
	伊藤秀雄
	市橋良宏
	井上治文
	佐藤義治
	井上義次
	石田樹

佐藤秀雄
山本光次郎
歌村彦四郎
市橋幸一郎
井上礼之助
井上松次郎
伊藤秀雄
市橋良宏
井上治文
佐藤義治
井上義次
石田樹

スポーツニュース

観世流柴田初太郎氏電話開通⑥六六七六番
三月一日金春流桜間弓川先生永眠さる

謹んで哀悼の意を表します
六月の狂言の夕、番組別掲の通り決りました
一向に出ない
狂言紹介(一)

(雁大名) シテ大名 アト太郎冠者
小ナド肴屋亭主

遠国の大名訴訟松く相叶い、帰国せんとして在京中、肝煎られた衆をざつと一振舞せりと、太郎冠者を肴屋町へ使に出す、太郎冠者は肴屋町で見事な雁を見付ける、

「御亭主それは何でござる」、「初雁でござる」、「求めたうござる」、代物は幾程でござる、「五百疋でござる」、「それは余り高値でおりやる、三百疋に負けて下され」、「初雁に限つて負けるはない、いやならばおかしませ」、「重ねて近付になつて求める為めぢや、どうぞ三百疋に負けて下され」、「重ねて近付になつて、求める為めぢやとおしやる程に、ヤこれ、代りもおかずだれへ持つておゆきある」、「身共をお知りやらぬか」、「イヤ存せぬ」、「頼ふだお方の身内に、太郎冠者と云ふ者ぢや」、「是は如何な事、頼ふだお方も存せず、又此方も知らぬに依つて、とかく代りがなければ雁をやることはならぬ」、……と云ふ事になり、代を取つて来るまで店を引く様頼んで、太郎冠者は帰つて来る、「イヤ爰な者が、肴屋町にある物が、何の役に立つものぢや、なぜ取つて来なんだ」、「代りが御座らねば、肴をよこさせぬ」、「身が者ぢやと言はいで」、「お前の者ぢやと申して御座れども、お前も存せず、まして私をも知りませぬによつて、肴を只おこそう様か御座りませぬ」、「ナゼ代りをやつて取つて来ぬ」、「代りをやらうにも、此方には御座りませぬ」、「あの何時ぞや、大分の鳥目を渡しておいたが何とした」、「あの仰せられます事は、永々の御在京に悉く使ひまして、もはや御座りませぬ」、「恥しい事ぢやが此方にも無い」、しかし呼んだ客人の手前、肴なしではもてなせないとあつて、肉の策をねるの太郎冠者代りなしで肴を考へる方法を考へ出す、「先

づ五百疋の雁を三百疋に負けさせて店を引かせました、商売人の事、定めて店へ出さぬと申す事はござりますまい、所へお前お出なされ、きやつが申す値に召上げられ、持たせてお出でなされる所へ、私が参つて、代りを持つて来た、雁を渡せと申しますせう、お前へ上げた申すでござりますせう、其処でお前と私が散々喧嘩を致しまする、時にお國言葉などお出しなされて、お刀の柄に、お手などを掛けられたらば、よもや亭主が扱はぬと申す事は御座りますまい、その良い間をみてかの雁をつい……と云ふ事になり、大名は肴屋で、慣れ合いの喧嘩を初める、……、「ヤイ、やいそこな奴、ヤアラおのれは、憎い奴の、最前から身を買つた雁に、何故手を指す、みようたを切つて斬下げてくれず」、「ヤアラ御仁体にも似合はぬ事を仰せらる、身共も似合に旦那衆を持つた、弓矢八幡、指もさす事では御座らぬ」、亭一要らぬ事をおしやるな、「推参な事をぬかし居る、たつた一打にしよう」、……「何ぢや亭主が扱ふ、よし、亭主に免じて勘忍しようず、亭主持つて来い、」

「畏つて御座る、南無三宝、雁をしてやられた」、……とまんまと成功したが、扱大名は、太郎冠者に、「忙がしいまぎれに鯛の端へちよいとお手の参つた所は、早い事で御座りました」、と突込まれる、そして、「國許の女共への土産にせうと思ふて」、と懐中からとつた物を取り出す。

一寸悪い狂言で、其上柄もよくないので余り出ませんが、お國言葉を出して雁を買ふ所等昔の御仁体でもない田舎大名丸出しで、面白い狂言だと思ひます、留は常の通りです。その内一度出してみたいと思つております。

五月の予告

五月三日	五流道成寺喜多流鑑賞能	茂山喜三
能橋弁慶	和島富太郎	吉田清三
能湯谷	喜多	吉田清三
能道成寺	喜多長世	吉田清三
五月五日	能楽クラブ	茂山喜四郎
五月十九日	掬水会	茂山幸四郎

名古屋のお宿
 推薦 推 鉄 国
 指定 社 公 交 通
 名古屋駅前 泥江町
 旅館 むせし家
 電話 ⑥ 1396-7

狂言

狂言の夕

昭和三年六月二十一日金曜
午後六時始
熱田神宮能楽殿神宮東門入南側

番組

蝸牛 山本光次郎 佐藤秀雄
蚊相撲 大名佐藤卯三郎 歌村鴻一郎
武悪 主河村丘造 井上礼之助

引くゝり 男歌村彦四郎 佐藤秀雄
伊藤宏文
市橋良治
井上祐一
佐藤友彦
井上義次
石田喜樹

狂言は能より一足先きに生れたもので意氣と熱情に燃えた民衆の芸術でありました。其取材たるや各層から自由に選び辛辣な皮肉や諷刺酒脱な諧謔や笑で演出された往時の現代劇であり喜劇でもあります。名古屋は狂言和泉流発祥の地とも云ふべく慶長の昔山脇和泉守元直尾張家の御抱えとして来住せしより代々三百五十年明治の時代まで続きました我々はこの由緒深き古く伝はる狂言を現代の民衆芸術として観直し其普及を図ることの有意義なるを思い敢えて心ある皆様

に呼びかける次第であります。

和泉流狂言 共同社

解説

蝸牛(かたつむり)
長寿の薬になる蝸牛を取つて来るよう云ひつけられた太郎冠者、藪の中に寝ている山伏を蝸牛と間違へてんぐむしと囃しさんぐなぶられる。思はず笑を誘はれる名作です。

蚊相撲(かすもう)
蚊の精が人間になつて大名に抱えられることになつた大名が蚊と相撲を取つて負ける大名と蚊と相撲をとらせるなど狂言の妙味であります。

武悪(ぶあく)
召使の武悪たが重なる不奉公のため主の氣を損じ主より武悪を成敗するよう仰付かつた太郎冠者討手には向つたが終に命を助け主へは武悪を討つたと報告する主も哀れを感じ心を慰めに東山に行く途すがらこれも命を助かつてお礼参りに清水へ行く武悪と出合ふ太郎冠者の機転で武悪を幽霊に仕立て冥土の有様など語らせるこれは狂言の内でも傑出した作品であります。

引くゝり(ひつくり)
ある男女房がいやになり追出さうといろいろ云ひふくめていとまの印になんなりとほしものを持つて行けと云ふ、さて女房のほしものとは?

五月の動き

五月三日 喜多流能楽館
能橋弁慶 シテ和島富太郎 吉田清三
能湯谷 シテ喜多 実

昭和32年5月1日発行
発行所 名古屋市中区東門前町1-1
井上重兵衛方 電話3177
名古屋狂言共同社同人
印刷所 同上
株式会社 地上社 電話1190

能道成寺

シテ喜多長世 吉田清三
狂言 二人袴 茂山彌五郎 茂山喜三
平田常三
芝山幸四郎

駕入に一人で行けぬ聲が親を舅の門前までつれて行くが太郎冠者に見付けられ招き入れられる親は袴が無いので伴の袴を脱がせて伴を待たせて通る呼ばれる度に穿きかへて出る内兩人一膳に呼ばれて当惑し袴の前後をさいて二つにして前に当てる二人共に通る、酒宴の後舞を望まれ後の無い袴を気にしながら舞ふ内見つけられて恥かしや。

五月五日 能楽クラブ

能田村 シテ伊藤嘉奈子 井上祐一

狂言 盆山 井上義次 井上祐一
盆山のすきな者、どうしてもほしい盆山を案内なしで借りて来ようと思つて忍び込む。見つかつてかかれた盗人を知らず知つた主人がいろ／＼なる内、鯛ぢやと云はれてひれの代りに鯛を立てたままではよかつたが鳴けと云はれてさあ大変。何と鳴きませうか? 五月十八日 九草会 松坂屋ホール

能花月 シテ観世喜之 井上松次郎

狂言 柑子 石田喜樹 佐藤卯三郎
主人から柑子三粒預つた太郎冠者が余り美味しさうなので一つ二つと食べて三つ共食べてしまふ。主人が掃り其言訳にほぞぬけ、つぶれと二つは返事が出来るが三つ目に困つて後寛の物語りをして太郎冠者の六波羅へ納まつたと云つて叱られる。

五月十八日 佐藤、河村、竹内演能 能楽殿

能杜若 シテ河村鉦二

狂言 月 佐藤秀雄 河村丘造
持仏堂を建立した田舎者が仏を求めに都へ上るがスツパにだまされるスツパは自分が仏師と名乗つて仏を引受け自分自身が仏になりお金を取つて逃げんとするが、印像が氣に入らぬとあつて直す為アチコチする内に鉢合せをして追込となる。

五月十八日 佐藤、河村、竹内演能 能楽殿

能望月 シテ河村鉦二

苦言

歌村彦四郎
最近の能(謡)と云つた方がよいかも知れぬ)の流行はすさまじいものがあります、それに

つれて各流での催能も数多い事でありませう。この番組作成にあたり昔からの、能五番に對し狂言四番、能三番なれば狂言二番と組むのがまよりであります。然るにこのごろは、催主の思惑か、お弟子の御意向か、なるべく短いものを一番との申出が多いようです、狂言はどうでもよいが間が入用だから仕方なくお義理に狂言を入れると云ふことでもあります、甚だしきは番組面だけ狂言を並べて時間の都合上とかで演技を取り止められることもありませう。こう云ふような催しに限つて、観客には狂言をより以上に歓迎されておりますことを付言いたしておきます。

狂言は能と共に存在すべき宿命であります、特に名古屋の狂言は御承知の通り徳川氏名古屋開府以来の伝統によるもので、一種の郷土無形文化財に等しい芸術であります、それが故に同人等は、別に生業を持つてその上の不利な立場にありながら、(こうせねば生きてゆけません)保存に力を尽し精進いたしてゐるものであります。

普通の狂言なれば十五分前後であります、あまりいやがらずにこれを加へて番組を組んでいたと御理解と、御同情をお願いいたします。

最後に能楽同好のみなさま、眼をひろくして、「三役」即ちワキ方、囃子方、狂言方、をふくめた役々にも認識を新にして、如何にこれらの人々が力を合せ、能楽普及に努力してゐるかを見守つていただき度いと存じます。

和歌藻沙草

喜多 古能

體にはならず立も居るも

(止) 宮増彌左衛門

年ふれば変ることのみ多けれど

鼓を囃す語人もなし

喜多 古能

留拍子踏前の足左をば

捻りて石は跡にふみとむ

(知) 喜多 遊齊

乳をあてに手をすえよとの教なれ

舞の構へも物かつぐにも

六月の予告

六月一日 五流道成寺完了記念乱能

六月一日 五流道成寺完了記念乱能

田鍋惣太郎(小鼓) 面箱 後藤孝一(小鼓)
三番叟 藤田六郎兵衛(首)
千歳 田鍋洋一(小鼓)

舞囃子 高 砂 鬼頭 八郎(太鼓)
大鼓 本田 秀男(シテ)
船鼓 高安 滋郎(ウチ)

狂言末 広 林 恩蔵(シテ)
大鼓 柴田初太郎(シテ)

仕舞 笠之段 山本 孝(太鼓)
大鼓 西村 欽也(ウチ)
通行人 高安 滋郎(ウチ)

狂言 太刀奪 本田 秀男(シテ)
大鼓 観世 喜之(シテ)

舞囃子 小袖會我 河村 丘造(狂言)
大鼓 井上松次郎(狂言)

小舞 宇治のさらし 加藤 良久(シテ)
大鼓 飯村 新一(シテ)

狂言 文荷 高安 滋郎(ウチ)
大鼓 田鍋惣一郎(小鼓)

舞囃子 西王母 野崎 太郎(シテ)
大鼓 知市 高次(シテ)

狂言 引 織 内藤 泰二(シテ)
大鼓 西尾孫太郎(太鼓)

列首 鬼頭 季信(首)
前シテ 田鍋惣一郎(小鼓)
後シテ 山本敬一(太鼓)

船弁慶 藤田六郎兵衛(首)
大鼓 吉田 定男(太鼓)

同 青木 恒治(小鼓)
大鼓 福王茂十郎(ウチ)

大槻 秀夫(シテ)
河村 総一郎(太鼓)

山本 勝一(シテ)
田鍋 惣太郎(小鼓)

西尾 孫太郎(太鼓)
田鍋 惣太郎(小鼓)

福井 啓次郎(小鼓)
大塚 一(太鼓)

河村 総一郎(太鼓)
大塚 一(太鼓)

河村 総一郎(太鼓)
大塚 一(太鼓)

河村 総一郎(太鼓)
大塚 一(太鼓)

河村 総一郎(太鼓)
大塚 一(太鼓)

河村 総一郎(太鼓)
大塚 一(太鼓)

河村 総一郎(太鼓)
大塚 一(太鼓)

河村 総一郎(太鼓)
大塚 一(太鼓)

河村 総一郎(太鼓)
大塚 一(太鼓)

六月二日 協会支部能

能花 月 竹市 秀雄 井上松次郎
能俊成忠度 塚本 秀雄 河村 丘造
能雲雀山 内藤 泰二 石田 喜樹

能殺生石 河村 鉦二 井上 義次
能遊行柳 柴田 初太郎 石田 喜樹
能殺生石 山階 信弘 井上 松次郎

六月五日 尙武会協賛奉納

能殺生石 河村 鉦二 井上 義次
能遊行柳 柴田 初太郎 石田 喜樹
能殺生石 山階 信弘 井上 松次郎

六月九日 観世会

能通小町 鳥沢 啓次 河村 丘造
能遊行柳 柴田 初太郎 井上 松次郎
能殺生石 山階 信弘 井上 松次郎

六月十五日 掬水書場夜能

能鶴 籠 柴田 初太郎 井上 松次郎
能小袖會我 佐藤 岩雄 井上 松次郎
能乱 河村 鉦二 井上 松次郎

狂言 腰 祈 河村 丘造 佐藤 友彦
狂言 重喜 石田 喜樹 佐藤 卯三郎

六月十六日 宝生定期能

能胡蝶 畑 富次 河村 丘造
能藤戸 宝生 英雄 井上 松次郎
能狂言 咲 河村 丘造 井上 松次郎

高級 ガラス 器

株式会社 トモエ硝子製造所

代表取締役 片岡 信一

名古屋市中区水筒先町2-16
電話 東局 ④7645, 7646

附 祝言

狂言

六月の動き

六月一日 五條道成寺完了記念乱能

能翁 シテ田鍋惣太郎 面箱後藤孝一郎

三番目藤田六郎兵衛

舞囃子 高砂 鬼頭八郎

狂言 末広 林 恩蔵 増田一雄

仕舞 笠ノ段 山本 孝

狂言 太刀奪 本田秀男 鶴世武雄

舞囃子 小袖曾我 河村丘造

小舞 宇治のさらし 加藤良久

狂言 文荷 高安滋郎 西尾孫太郎

舞囃子 西王母 野崎太郎

狂言 引繰 内藤泰二

能船弁慶 シテ田鍋惣一郎

山本敬一郎

青木恒治

六月二日 支部能

能花 月 シテ竹市秀雄

能俊成忠度 シテ塚本秀雄

狂言 雷 井上松次郎

能雲雀山 シテ内藤泰二

河村丘造

井上義次

石田喜樹

井上松次郎

井上松次郎

井上松次郎

井上松次郎

井上松次郎

井上松次郎

井上松次郎

能殺生石 シテ河村鉦二

尚武会協賛奉納

六月五日 狂言 歌争

全 日 出資者招待能

能小銀治 シテ山本博之

狂言 鐘の音 井上松次郎

能通小町 シテ鳥沢啓次

遊行柳 シテ柴田初太郎

能殺生石 シテ山階信弘

狂言 腰折 河村丘造

六月十五日 能鶴 龜

能小袖曾我 シテ佐藤岩雄

能乱 橋岡久馬

狂言 重喜 石田喜樹

六月十六日 能胡蝶

能藤戸 シテ宝生英雄

井上松次郎

井上松次郎

井上松次郎

井上松次郎

井上松次郎

井上松次郎

井上松次郎

井上松次郎

井上松次郎

井上松次郎

井上松次郎

井上松次郎

井上松次郎

井上松次郎

井上松次郎

昭和32年6月1日発行
発行所 名古屋市中区奥門前町1/1
井上重兵衛方 電話3177
名古屋狂言共同社同人
印刷所 印刷社 電話1196
株式会社 地上社

狂言の夕

昭和三年六月二十一日金曜
午後六時始(会費貳百円 学生券百円)
所 熱田神宮能楽殿神宮東門入南側

番組

蝸牛 山本井上松次郎 佐藤秀雄

蚊相撲 大名佐藤卯三郎 市橋幸男

武悪 主 河村丘造 井上松次郎

引くり 男 歌村彦四郎 伊藤宏文

井上松次郎

井上松次郎

井上松次郎

井上松次郎

井上松次郎

井上松次郎

井上松次郎

井上松次郎

井上松次郎

井上松次郎

井上松次郎

井上松次郎

井上松次郎

井上松次郎

井上松次郎

井上松次郎

井上松次郎

井上松次郎

井上松次郎

井上松次郎

井上松次郎

井上松次郎

井上松次郎

狂言解説

○末広 脇狂言の代表、末広がりを買いに都へつかわされた太郎冠者。それが扇である。売りを知らぬま、スツパにだまされて傘を売らなければならない。狂言の面白さを教わつ

てあやふく主人の御機嫌を取り結ぶまでのいきさつは終局の囃子物のにぎやかさと傘を末広がりとたまされるおかしさにある。

○太刀奪 北野のお手洗参詣に出た主人と太郎冠者貧乏ぐらしで太刀の無いをかこつ所へ見事な太刀を持つ奉公人をみかけ鈍な太郎冠者が主人の小刀を借りて太刀をとらうとして却つて奉公人に小刀をとりあげられる之を取り返へさんと二人でヤツト奉公人の帰りを捕えるが、扱縛る縄をなつてみたり鼻しつべいを掛け損つたり拳句の果て奉公人を縛るつもりで主人を縛る太郎冠者の呆けた仕様の可笑しさ。

○文荷 小人狂ひの主から文を頼まれた太郎冠者と次郎冠者、持ちとむない文を竹植で荷つて語りながら行く内に見たくなり結び文を解いて読み合ふ内に取り合つて之を破るサアどうしますか風流な冠者達の考へは、浜松の風の便りと果してと云いますか。

○引繰り ある男つれそう女房が嫌になり追出さうと種々言ひふくめていとまの印に何なりと怒しい物を持つて行けと云つた。扱女房の欲しい物は何でしたせう。

○雷 武蔵野の真中で夕立に逢つた針匠の目の前に雷がおちる、腰を打つて起らない雷に恐る／＼針を立てた針匠者。強い雷の雷が人間以上に針を痛がるおかしさ、狂言独特の音響効果でピツカリガラ／＼と口で云いながら登場する雷が、代物の欲しい針匠者に持合せがないから重ねて眷属共を引連れてお主の所へ落ちて礼をするると云つたり、独特の面白さを御覧下さい。

○歌争 野遊びに誘ひに来た友達に芍薬の花を見せて風流振つて吟じた歌が相手に笑はれたので同道した道で相手の詠んだ歌を笑ふ、之れが基で相撲となる。「咲くやこの花」と「芍薬の花」「風騒ぐなり」と「風さわぐんなり」の秀句を種に風流ぶる庶民のおかしみをみせた皮肉な狂言です。

○腰斬 百歳に余る祖父、可愛い孫の郷の殿が修行より帰つたとの話を腰が曲つて目の目が見えぬとぐちを云ふ、日頃の修行の験

をみせるため腰を伸して進ぜよう。一折り。伸びた腰に一時は喜んだ祖父も之きり曲らぬと聞いて大弱り元の通りにして返せと叱られてあわてた郷の法力は折れば折る程伸びすぎたり。かゞみすぎたり。わづかの法力を誇示する修験者の失敗。祖父の身のこなしと言葉が本当に見えれば成巧と云はれる六ヶ敷い狂言です。

○重喜 法事に出かけようとした和尚相にく頭をそり慣れた弟子の居ぬのに困つてゐるのを小坊主重喜が私をそりますと云つてかみそりを持つて師匠につまづく、師匠が「弟子七尺を去つて師の影をふまず」と云ふ格言で小言を云つたので、重喜は思案の末、師の影をふまずに髪をそる事となるその結末はどうなるでせうか。

○鐘の音息子の刀の差し初めの祝に黄金造りの太刀を造らうと鎌倉へ付け金の値を開きに太郎冠者を出す、鈍な太郎冠者の聞て来たのは鎌倉の寺々のつき鐘の音。謡はかゝつて鐘の音を報告する太郎冠者の姿はのかたかな室町時代の風情を浮び上らせることとせう。

○咲咩「身乞いの咲咩」と云ふ異名付きの悪者をうつつかり都の叔父御と云はれて連れ戻つた太郎冠者。主にたしなめられて此悪者の相手をするが付焼双の相手手の小鳥を好く話からうぐいすを忘れて、ぐいすと言つたり、囁かすめを五連とつたとか散々の不調法。

尙察化(咲咩)について「不審紙」にはこのさつくわとあり此説明に、此話は周易より出しか、又周易の変卦は自然と此話に似たる、龍は陽九の数にて九々八十一鱗有て乾に象る。鱈は陰六の員也六々三十六鱗有て坤に象る。黄は坤土の正色。三月は夬の卦にて坤より変して一陰尙残る。四月は純乾の卦にて坤尽く変して乾となる。是鱈の龍に変化する事四月に有り鱈は陰の数にて地に象る文字も里に從ふ故に本邦古代一里を六丁と定め其後六々乗じて三十六町と改め給ふ。

敗者故にこいと言ひし事にや、さつくわと言ふ其時の式に感じいろ／＼の者に成つて人をたらす成べし、惣じて田舎の者はかならず国弁有る物也、夫を程能く察して化するの義にて此狂言の名目に附し、今言ふかたり杯の類か、右を古言に似鱈と言ふか田舎者に程能く察して化するれば似声か?とあり又和泉流では見乞の咲咩といひ一世の盗人は人の目かわを忍ぶで取る、さやつは見た物を乞ふても取るによつて見乞と云ふ、咲咩とは盗人の異名ぢや」と主が説明する通り、今で云ふ恐かつゆすりもするよくな悪者になつてゐる、果してにこいが本当か見乞いが本当か、狂言に出てくる御本人は、そのわりにしてはオツトリした人物で、甚だ悪者らしからぬ人体であるのも妙です。

蝸牛(かたつむり)
長寿の薬になる蝸牛を取つて来るよう云ひつけられた太郎冠者、藪の中に寝ている山伏を蝸牛と間違へてん／＼とむし／＼と噛み殺さん／＼なぶられる。思はず笑を誘はれる名作です。

蚊相撲(かづもう)
蚊の精が人間になつて大名に抱えられることになり大名が蚊と相撲を取つて負ける大名と蚊と相撲をとらせるなど狂言の妙味であります。

武(悪) 悪(ぶあく)
武使の武悪たび重なる不奉公のため主の気嫌を損じ主より武悪を成敗するよう仰付かつた太郎冠者討手には向つたが終に命を助け主へは武悪を討つたと報告する主も哀れを感じし心を慰めに東山に行く途すがこれ命を助かつてお礼参りに清水へ行く武悪と出合ふ太郎冠者の機転で武悪を幽霊に仕立て冥土の有様など語らせるこれは狂言の内でも傑出した作品であります。

末廣の「はやしもの」
歌村彦四郎

狂言でも能でも、随分学者の研究にも拘らず判全せぬものがあります。

「末広」の最後に太郎冠者、權掛りで「傘をさすなる春日山」の拍子をとむ、此のクライマックスの文句を考へると、とんと判りませぬ、文化三年家元元樂の秘伝聞番より、「笠をさすなる春日山、是も神のちかひとて人が笠をさすなら、吾も笠をささうよ、爽にもさあり、やがりもさうよの／＼」

末ひろがり

一、大明(名) 出て人をよび出す。都へ行ていかにもたかい(高)末ひろがりかふ(買)て来よとゆふ。さてのぼる。都につきてよぼわるべたらし一人出て、さし笠も売る。もしせう(主)はら立ばはやし物。(御笠山)人が笠をさすならは我も笠をささうよとおしゆる。くだる。しうこれ見てはらをたつる。おつぱしらかす(追走)其時はやし物。しううかる。もろともにおどる。ふへとめ(シヤギリとめの事か)

とありまして梗概と主要部の文句丈けです。が充分想像できます舞台は現在の者とは似通つておると思はれます。しかし、はやし物の文句は春日山でなく御笠山となつておるのを見て昔は三笠山ではやしした物でないでせうか、御参考までに。

狂言解説(2)「薩摩守」

はるか遠國の僧住吉天王寺へ参詣しようとして道すがら茶屋に休んで茶をのむが茶代をおかずに立つて行く茶屋の亭主は一旦それをとがめるが持合せがないと知つて「この先に神崎の渡しと云ふて大事の渡しがあるこれは船中で船賃を取らねば渡さぬが御坊は何と召さる」

「それならば是非に及びませぬあれへ参つて拜うだもこれから拜うだも同じ事のごさるこれから拜うて下向しませう」と拜むので茶屋は神崎の渡守が秀句好きで秀句を言えれば喜んで舟にのせるによつて秀句を教えてやらうという……さて船中で船賃をおこせと云はゞ

名古屋能楽界の元老
田鍋惣太郎氏夫人 五月十九日逝去せらる 謹んで哀悼の意を表します。

共同社

平家の公達とおしやれ心はと云はゞ薩摩守。又心はといはゞ忠度とおしやれこれにはわけがある昔平家の公達薩摩守と云ふ人があつたその名乗を忠度と云うた、今そなたがあれへいて船に只乗りと古の薩摩守の名乗をよせ合はせて忠度と云ふは何と面白くないか。出家は喜んで、旅は情け人は心と申すが感謝しながら大河へ出る渡し守を呼ぶがながく応じない、道者余多あると偽つて危く船に乗る船賃を渡せと云はれて「船賃は物ぢや」「物とは」「平家の公達」……「神崎の渡し守がこれ程の事合点ゆかぬと云事はあるまい」何平家の公達ハハア若しこれは秀句でないかの」と喜び「不審がある神崎の渡し守が秀句に好く事何とお知りやつた」と聞くのに、東の果までかくれがないとでたらめを云ふので渡し守は喜んで心を開き薩摩守までは出たが後が出ず、のりだけを覚えていてその連想で窮した余りひねり出したのが青のりのひきはして面目もない留になる。

只一つの秀句によつて劇的場面を盛り上げる。機知滑稽の即興秀句が一貫して一曲を貫きそここの狂言の趣向がある。不審紙に津国江口灘渡江の初なれば江口と云昔は西海船京師に至る時川舟に乗替る。江口の渡、淀川の支流也川の名神崎川又の名三國川とも云とある。

さりきりひ (去嫌)

目出度き席などにて思はしき文句を飄ふは尤も憚るべきで古人の教えとして伝えられたもの、御参考までに。

婚礼の席にて、のく。さる。かえる。かえす。かさねて。かづく。なほく。秋及び謡の返しは飄ふまじきなり

移転、新宅の席にて、もゆる。火。やくる。煙。くづる。倒る。船中及出船には、かへる。しづむ。波風。あらし。

仏事追善に、迷ふ。洗む。やみ。くらす。噴毒。くるしみ。

諸祝儀に、死ぬる。冥途。苦しむ。乱る。憂。涙。く

づる。あは。外に、其家。人の姓名の文字ある謡はさけらる。例婚礼の席にて三輪の「契りも今宵斗りなり」

新宅びらきに杜若の「情濃なる浅間のたけに立煙」又鉢の木「榎土のたく火はおためなり」出航の門出に、清経の、舟よりかつばと落汐の等。

間狂言の調子について

古書にこんな事が載つて居ります。

狂言の調子は第一の調子にて一大事なり前の中入の調子をよく吟じ、相応して言ひ出し、中項よりちと調子を上げて語り、納めの時分に元の調子に直し止むべし。

早打の類、道成寺のあいらい竹雪などのあいらい、加様の類は如何にも調子高に言てよく如何にも荒々といふあいらいなり、謡の調子より一調子高くいふあいらいなり、葵の上のあいらいも是に同じ。

「鉄輪」「邯鄲」「江口」「松風」の類は調子高きを嫌うなれば其謡の調子にしてあいらうべし、加様の類多し、よく分別あるべし。

隠れたるを慎しむ

わらんべ草に「狂言に酒に酔ふ所あり、能に乱あり、よろめくに習あり、目すわり、舌弱くなり、あまり舌萎え過たるは詞きこえず、万すぐりはあぢきなし、たらぬも、よからずよきほどがよき也」と言つて居るのは中席を尊ぶ狂言の芸術を説いているものであり、世阿弥の習道書に「返すをかしなればとてさのみに卑しき言葉風体ゆめくあるべからず、心得べし」とくり返してきめいているのも、幽玄の原則にかなつた「上階のをかし」を理想としたからで、それ故にこそ狂言の向上もあり厳格な戒も心構へも生れてくるのである。楽屋にての法度として大酒、大食、口論、高声高笑等を戒めているのも、隠れたるを慎む心的態度を養成するためである。

楽屋の心構えが充分であれば迫力ある芸術も備はり、上階のをかしを表現する心構えも出来て来るのではないだろうか、やりすぎない

「能の狂言」ではないはづです

こと。隠れたるを慎しむ。守ることは六ヶ敷い事である。

一度能を見た人は誰でも気のつく事であるが一番の能が終つて次の狂言にうつるといままてひどく緊張していた見所が急にさわ／＼して、いまはじまつたばかりの狂言を尻目に席を立つたりお互に話し合つたりする。

だいたい能の観客は狂言をそえものにすぎないと思はれるのは観客自体が謡をやりそのために来る人が多いためもある。その上能と違つて狂言は初めて見るものもくつろがせるものを持つて居るといふ芸術としての本質的な違いから来る気安さがおこつて来ることも事実であるが、一番見逃せないのは現在の狂言は能をひきたるために能に從属し、又は附随した演技としか一般に考えられていないことにある。

狂言はもとく能に從属する能の狂言であつたらうか。

開花期の狂言は決してそうでなかつた事は学者の研究によつて種々証明されている。猿楽狂言についての最初のヤ、具体的な記録があつたが、引用されている、看聞御記応永三十一年(一四二四)の事件。

そこでは伏見御香宮という貴族の在所で行はれた猿楽であるのに公家の落ぶれた姿をおかしげに演出してこつびどく叱られたり、山門で興行した猿楽が日吉社の使獣とされた猿を狂言にし出して山法師の怒りを招き又傷沙汰にまでおよんだ。とらもあらうに仁和寺で、興行した猿楽が法師を笑いとばして、とうとう、大切な楽頭の権利を奪いとられたというような記録である。

今見る狂言ではほとんど考えられないような鋭い諷刺的な演出がされて来たといえる、「おかし」の芸術である滑稽な物真似やこぼかす程の鋭い諷刺にまで高まるところに狂言の独特な庶民の立場からの解放感を表現する芸術としての地位が保証されるのである。

本

新刊書籍・雑誌

古書籍誠實賣買

信用第一

市電赤門通電停前西側

文光堂

名古屋市中区南大津通5 電話②3410

狂言

九月の動き

九月一日 出資者招待能

狂言 磁石 井上松次郎 河村 丘造

班女 シテ大槻 秀夫 ワキ高安 滋郎

(二部) 河村 丘造 井上 祐一

狂言 雁大名 井上礼之助 井上松次郎

弱法師 シテ橋岡久太郎 ワキ西村 弘敬

九月十五日 岐阜丹下舞台

磁鉢ノ木 シテ海老沢延由 ワキ西村 弘敬

班女 早打 佐藤 秀雄

班女 シテ下元 友次 ワキ高安 滋郎

能奏 上 シテ長谷川徳三 ワキ高安 滋郎

狂言 不須 井上礼之助 河村 丘造

九月二十三日 山本博勝会

能鳥追舟 シテ山本 博之 ワキ高安 滋郎

狂言 萩大名 山本光次郎 佐藤 秀雄

九月二十九日 中日五流能

能頼 政 シテ近藤 乾三 ワキ高安 滋郎

能望月 シテ金剛 巖 ワキ西村 弘敬

能望月 シテ梅若万三郎 ワキ宝生 弥一

狂言 鳴子 井上松次郎 河村 丘造

(二部) 能馬頭 シテ喜多 実 ワキ西村 弘敬

昭和32年9月1日発行
発行所 門前町171
名古屋市中区兵衛町3177
井上狂言共同社
名古屋狂言共同社
印刷所 同上
株式会社 地上社 電話21190

「狂言解説」

「磁石」田舎者大津松本の市にて水破にたられ二貫文で人質に売られたるを、夜中の話声で知り翌朝水破に化けて二貫文をとって逃げ出す、水破恐つて追つかけてすでに危き時田舎者抜いた太刀をみて「吞まう」と云う。水破は驚るゝ何者と問ふ、田舎者は「唐と日本の境界ちくらが沖と云ふ所に磁石山と云ふてある其山の磁石の精だ」と云ふてどうおさまるか数多い狂言は水破がほとんど成巧してゐるのに水破の上を行く田舎者が出て水破がたられる狂言はこれ一つです。

狂言「ほれ話」

（第一回）
狂言は六百年の昔に作り出された中世期の素朴な演劇でありまして、その舞台で使われる言葉も、そして扮装も、すべて過去のもので、登場する人物でも、取扱つてゐる事柄でも、凡そ現代とは縁の遠いものと言えましよう。その例を挙げると昔の芸、しかも様式化された古典演劇の狂言が、何故近年特に演劇関係の人達の間に注目される様になつて来たか。そしてこれが大きな将来性を持つてゐるといわれる様に何故なつたかと申しますと、狂言独特の演技術、それに何時の世でも變り無い庶民の人情といつたものを端的にずばりと指摘しながら、これを人間味のあるユーモアで打出している所に興味を持たれる方が増えたのではないかと私は密かに想像しております。

初代井上菊次郎

谷潤一郎の「月と狂言師」は、大藏流再興の狂言師茂山千作を中心とする、和やかな月見の宴の情景を描いたものである。その千作が八十七の天寿を全うした追善に、「狂言八十年」が出版された。二十六年秋である。京大遊学中、上御霊神社に、茂山社中の月並奉納狂言があり、近くに住んでゐるため、何度となく拝見した。明治天皇に奉仕した小倉典侍のお姿も折々見えたことなど、三十年の昔を偲んで、興味深く読む。

「狂言」は「狂言師」は、大藏流再興の狂言師茂山千作を中心とする、和やかな月見の宴の情景を描いたものである。その千作が八十七の天寿を全うした追善に、「狂言八十年」が出版された。二十六年秋である。京大遊学中、上御霊神社に、茂山社中の月並奉納狂言があり、近くに住んでゐるため、何度となく拝見した。明治天皇に奉仕した小倉典侍のお姿も折々見えたことなど、三十年の昔を偲んで、興味深く読む。

と出て居る。なお二日目松間伴馬の自然居士
寝音曲 井上菊次郎 伊勢 門水
未広がり 井上菊次郎 井上鉄次郎
井上新三郎

に、田鍋惣太郎さんが小鼓を打つて居られるのも珍しく拝見した。

翁附能九番 狂言七番は例の少い催しで、九時から始まり、夜はかぎり火をたいたと云う。東西一流の人たちの競演の中に伍して、名古屋連中が二番も勤めたのは、思うに初代菊次郎の雲の光りであろう。

三宅藤九郎の追憶談に、明治大正の狂言師に長寿者が多いとして、先代茂山忠三郎、先々代千五郎、山本東、野村萬斎と並べて、初代菊次郎を挙げて居る。以て初代の芸界に於ける地位を測定すべきである。

共同社の諸賢も、初代菊次郎にあやかつて、ふくら雀の福々と、百まで舞台上に花を咲かせていたごさい。(中京大学教授)

ひとりごと

歌村生

一、狂言の夕 狂言の夕は、戦後初めての試みでありましたが、幸ひに皆様の御理解を得まして、予想外の御来場を賜り、厚く御礼申し上げます、折あしく小生病気再発いたしましたので、絶体安静中に、出演出来なかつたこと、謹んで御詫が申上げます。

然し来春第二回、狂言の夕を開く予定であります、何卒御期待下さいまして、より以上の御後援を今から御願ひいたします。

一、パリ能

本年のバリ能に、狂言が参加したことは、誠にさうあるべきこととあります。だいたい、能の番組に、狂言がないのは、刺身につまを忘れたようなものであります。そのうへ、上演された結果は、狂言が一番人気があつて、アンコールも一番長かつたと云ふこととす。初めて観た、外人達でさへこの有様であります、日本人も、もつと祖先の、このよい芸術を篤と見直してほしいものであります。

一、田鍋氏の東京記念能

田鍋惣太郎師は、実に偉い人であります。偉いと云ふ言葉は、つよい、すぐれてゐる、偉大である、と云ふことださうであります。能楽堂の建設に当つては、一部の不協力者の非りをうけながし、兎に角、先頭に立つて完成に導かれた事は、感激の外ありません。五昨春より今春に涉つて、五流道城寺を演了

せられ、いきもつがずに、今秋の東京に於ける、舞台六十年記念能の催しであります。老令、なほかくしやくと云ふことは、この田鍋惣太郎師に、最も適切に当てはまることと思ひます、東京記念能の盛大に終了いたしましたことを祈つております。

拍子と囃子

歌村彦四郎

古書 檢 (古書檢として本紙に掲載いたしますものは、家元の「秘伝聞書」よりの抜萃で、今日まですべて未公表のものであります) われは拍子、囃子と何気なく呼んでおりますが、その解釈を文化五年六代目家元、元業が書いております、真偽の程は学者に譲りまして、当時の家元が自分丈の苦心を、そつと書きとめておいたものと思はれます。

一、拍子、ト云ハ、字音ニテハナキ也、和語也、併、何ノ事カ、仮名モシレヌ也、但徠先生、トヤラ云、学者有、其人ノ書物ニ、可成談ト云、書物有、其書ニ、此の拍子ノ説有也、ひやうしト云、本ハ、火あやふしナルベシ、源氏物語ニ曰ク、夜マハリタル、火あやふし、火あやふし、ト云テ、マハリタル、有也、今ハ拍子木ヲ、打テ、用心ニマルホル也、此、拍子木ノ、本ハ、火アヤフシ、ト云コトニテ、其火アヤフシガ、ツママリ、ウツリ、シテ、拍子ト、云事ノ、様ニナリタルトミエタリ、併、其比、今ノヒヤフシ木ノ、名、何トゾ、云タルカ、ヒヤフシ木ハ、手ニテ、打ツ物ナレバ、拍ト、云字ヲ、ウメテ、拍子木ト、書有也。

拍子木ハ、手打ツ物ナレバ、夫ヨリシテ、スベテ手打事、又ハ足デフム事迄モ、拍子ト云物ニ、ナリタル也。一、はやし、ト云意ハ、ハエアラシ、ト云事也、常ニ、物ゴトニ、花ノアル、ナイヲ、ハエノ、有ノ又ハ、ハエノナイノト云、其、ハエ也、謡ニテモ、舞ニテモ、其物ニヨツテ、ハエ、アラセ、花ヲツクル事、ナルニヨツテ、ハエアラシ也、謡舞ニカギラズ、何ニツテモ、唯シタテル事ハアラシ也、榮アラシ、ツツマリテ、はやしト云也、去ニヨツテ、囃子ノ衆ハ、謡舞ニ、榮アラサガ、囃子方ノ、趣意也、ト、謡ガ、主ニテ、囃子ノ衆ガ、ハ

十月の豫告

十月五日 田鍋惣太郎舞台六十年記念能 於水道橋能楽堂

十月五日 喜多会 田村 シテ松村治郎兵衛 佐藤 秀雄

十月六日 清韻会 狂言 杭か人か 佐藤卯三郎 河村 丘造

十月六日 喜之 喜之 高安 滋郎

十月十三日 能楽クラブ 狂言 子盗人 井上松次郎 井上礼之助 佐藤 秀雄

十月二十七日 名匠鑑賞能 狂言 雁 市橋 幸男 山本光次郎

十月二十七日 井上松次郎 能松 風 シテ観世 喜之

能安達原 シテ梅若 六郎 井上礼之助

狂言 栗 焼 佐藤卯三郎 河村 丘造

御礼のことば

○去る六月二十一日狂言の夕は各位の絶大な御援助により盛況裡に終りました事を同人一同心から御礼申し上げます今後より一層の御後援をお願いいたします。 ○本誌も回を重ねて第八号皆様の御支授と御理解により大部体裁も整つて来ました殊に本号には中京大学鈴木教授、東京三宅藤九郎氏其他諸賢から御投稿を頂きました誌上より厚くお礼申し上げます。若手能楽師の結成する野球団青陽チームは八月二十三日午後三時ヨリ西川鯉三郎チームと森永エンゼル球場に会戦六対二にて初優勝を飾る。 (共同社編輯部)

登録商標 御千代寶

登録商標 尾張名古屋は 城で餅

登録商標 薄氷

中区宝町一丁目 亀末廣

電話局 三三〇三 三四四六

狂言

十月の動き

十月五日 田鍋惣太郎舞台六十年記念能

十月五日 喜多会 於水道橋能楽堂

十月五日 田村 喜多会

十月五日 狂言 杭かか 佐藤卯三郎 河村 丘造

十月六日 鳥屋 清 額会

十月六日 能求 塚 須 語 佐藤卯三郎 弘敬

十月六日 半能石橋 大槻 秀夫 河村 丘造

十月十三日 狂言 子盗人 井上松次郎 井上礼之助

十月十三日 能楽クラブ

十月十三日 葛城 河村 恒三 西村 欽也

十月二十七日 狂言 雁 礫 市橋 幸男 山本光次郎

能美 盛 名匠鑑賞能

能松 風 シテ観世 齊一 井上松次郎

能安達原 シテ梅若 六郎 井上松次郎

狂言 栗 焼 佐藤卯三郎 河村 丘造

「狂言解説」

「杭かか」 大の憶病者のくせに強がりや云ふ、太郎冠者。一人で留守番をさせられる。石が人に見えたり杭が人に見えたりピクピクで夜廻りする。主の帰つた立姿に「杭

昭和32年10月1日発行
発行所 名古屋市中区東門前町1-1-1
井上重兵衛方 電話3177
名古屋狂言共同社同人
印刷所 印刷所
株式会社 地上社 電話1196

かか」と問ふのに「杭」と答えられ「杭なれば安心」と胸をなでおろして、ハテ、ピツクリ、槍を引たくられて、宝物の在所を教えるから命を助けてくれと言ひ出すので主はあきれて、太郎冠者の憶病に腹を立て、追込む。

「子盗人」 乳母がヤツト寝た子を奥の座敷へねかして仕事に立つた跡へ盗人が入り物色する内に子供が目をさますあやしている内に我を忘れて浮かれ出し乳母と主人に見付けられ。盗人は子をたてに逃げる。

「雁礫」 狩に出た大名、野原に降りている雁を見付け射んとする所へ、通りかゝつた通行人が礫を打つて雁に当てる。大名は俺の射る雁に何故手をつけるかと恐る。礫で打つてつたのだから持つて行くと言争ふ、矢の跡がないと云つても狙い殺したと云張る大名に、

「栗焼」 栗を焼くに云付けられた太郎冠者は、弓矢を改め精一杯ねらつたが……四十個の大栗をお台所で焼く。独り言を云ひつゝ、栗を焼く内余りよい匂いについ一つ二つ来客用に只さへ足らぬ栗、皆食べて仕舞つた太郎冠者。得意の口重宝で、窯の神と三十四人の公達へ進じたと申上げたが、後の残り、

「奈須語」 屋島の物語りは通常居語りで所の者として鑑引の条を語るのだが「奈須の語」となる替間の習物として三番豊済でなければ出来ぬものとされております。

仕方語で奈須の与市宗高の扇の的のくだりを独演するわけですがメリハリから言葉まで

普通の居語りと変つて来、殊に義経と、後藤兵衛実基と奈須の与市と三名の独白がそれ、位が違います。此、狂言の型から採つて、六代目菊五郎が所作家抱落の中で此奈須語を演じて好評を拍して、狂言界では大蔵流茂山弥五郎氏が天覧の光榮に浴しておられます。気魄とキビキビした型で表はすいかにもおぼろかな、判官の態度、重厚な実基の姿若々しい与市のキビキビした姿を眼前に目的の情景を只一人で語り演ずる、独得の間語りに御期待下さい。

狂言「ほれ話」 第二回

三宅 藤 九郎

又「釣狐」という狂言があります。この狂言は様式的な仕科をしながら、見物にはひどく写実を感じさせるのであります。狐が狛師の伯父である伯藏主という坊さんに化けて、狛師の家を訪れまして、「狐を釣る」と恐ろしい祟りがあるぞと云つて、「玉藻の前」の物語りを聞かせます。そして狐を釣る罟を捨てさせて帰る途中でその罟に掛つてしまふという筋であります。それは狐の生體を示しているいろいろな仕科があります。例えばどだけ化け終せたかとの自分の姿を水に写してみたり、犬の鳴聞に答えて逃げ廻る動きも、あくまでも狂言的な様式を崩さず演劇的実実を現わすのであります。この釣狐という狂言は二百五十余番ある狂言の中でも最もむずかしいものの一つで、いろ／＼な秘伝口伝があるのでございませぬ。狐という動物が人間の老翁に化けた姿を現すために、先ず前屈みの姿になりませぬ。そして胸郭を広げず、お腹を凹ませるのです。これは他の狂言の時とは全く反対の姿勢で、腹を張つたり、お腹を出す不審の習慣が封じられるのです。そうして杖を持つた右の手を鳩尾の辺りにびたりとつけて左の手をその下に重ね、両方の腹はこれもびつたり脇腹に附けるのです。足は蹴足といつて爪先を中の方へ打出ける様になります。こうした窮屈な姿勢でまともな発声をしなければなりません。しかも時々狐の本性を現わして飛び上つたり、跳ね廻つたりして、又一瞬老翁の姿

に還るといふような事を殆ど独演で一時間余りこれを繰り返すのです。ある作家の方がこの釣狐を見物されて、これ程肉体的苦痛を強いる演劇というものは世界中何処にもあるまいと評されたといふこと。事実これを勤める者は全く血が出る様な猛練習をしなければなりません。血が出るだけならまだいゝので、この釣狐を演つて気遣ひになつた狂言師が二人もおります。和泉流の狂言師で小早川精太郎という人がおります。この人はなかなか立派な芸の持主で人格者でもありますから大正の始め頃まで舞台に出ていた人です。坪内逍遙先生が文芸協会を改組して、その文芸協会の中に演劇研究所を設けられた時、俳優を養成するに當つて声の習練と狂言風の科白を教える先生として小早川さんが迎えられた。坪内先生のこの企ては歌舞伎調や新派調の科白廻しを破るには狂言調を加味したエロキエーションに依るのが一番良いという持論を実践された訳で、今の河竹繁俊先生なども此の時研究所の生徒として狂言を習われたと伺つています。この研究所では小早川さんがお休みの時は坪内先生の甥御さんである大造さんが代稽古をされたといふ事があります。この小早川さんの先代の精一さんという人は釣狐を勤めてから急に気が変になつて近くなりまして、九州の熊本の会を小早川さんが主催して、九州の熊本に化けた狐がいよ／＼本体を現して罟に掛る前、一旦舞台から引込みます。そして急いで狐の毛皮に着替へなければならぬのに本人の姿が見えませぬ。皆んなが手分けして捜しますと、條々と風呂に這入つて居る仕末です。さあ／＼早く／＼とせきてきて、やつと装束を着せて舞台に出し、先ず／＼無事に演じ終りました。この時既に発狂して頭がおかしくなつて居るのに、この釣狐は誠に見事な出来であつたといふのでありますから驚歎の外はありませぬ。

さて其の夜が大変で、夜中にいきなり宿の雨戸を明け抜けて「クワイー、クワイー」と狐の鳴声をしながら釣狐の稽古が始まつたといふ事です。そこで弟子が附添つて東京へ帰ることになり、門司から舟で下関へ着くと、ブラッ

トホームの売店が皆買つてやるから汽車へ持つて来いという訳で、新聞、雑誌、ビール、アンパン、サンドイッチ等を列車内に運ばせましたから、お弟子は驚きました。誠に申訳ないが実はこういふしかなかうと説明して引取つて貰つたという仕来、こゝして聞もなく小早川さんは逝くなりませした。小早川家には元來精神病の血統は無いのですが、こゝ偶然に二代とも釣狐を演じて狂狂されたという事は釣狐といふ狂言が発声筋に無理を加えるばかりで無く、如何に肉體にも精神にも苦痛を与えるものであるかがこの事によつても証明されるような気が致します。この狂言を勤める者は定められた養生訓を嚴重に守つて、しかも長い時間無理な姿勢を生ずるといわれておられます。ある狂言師がこの練習を怠つて釣狐を勤めました処が途中で息が切れて倒れそうになつてしまいました。この人は宝丹という薬を持薬にしていたので舞台で科白を云う合間へに宝丹と謔言のように、宝丹の薬を持つてくるように後見に頼んだという笑話もありませす。この狐の装束を着ける処を楽屋の者にも見せないために「鏡の間」の隅に屏風を立て廻して其の中で装束を着ける定めになつております。

精進をして身を慎まなければ勤められないものに『三番叟』があります。三番叟は何時

も番組の初めに勤めるもので能楽の方ではこれを国土安穩の御祈禱として、又平和を寿ぐ儀式として、こればかりは他のものとは違つて単なる演技では無いとまでに神聖視してあります。ですからこれを勤める者は別火(ベツカ)という行事をいたします。別火(ベツカ)というのは、火鉢の炭火や煮炊きの火まで、他人は勿論、家族の者とも別にします。火を別にするベツピ即ち別火であります。出演の当日は楽屋でも別火の火鉢を用います。別火の期間は二十一日間で、略式別火は一週間、この期間中は火を別にするばかりでは無く精進潔斎する。女の人は口を利いてもいけないこと云われませす。この別火も今ではいろいろない事情からゆるやかにになりましたが、二十三年前までは私達もきちんと守つてやつておりました。これはなか／＼不自由な事で、例えば買物をしたくても女店員が出て来ると逃げ出さなければならぬ。口を利く事を禁じられてゐるからでせす。私が初めて三番叟を勤めた時、楽屋の入口の辺で、ハンカチを落しませした。気がせいでいたのでしようか落した事に気がつかず、そのまゝ楽屋へ入ろうとするのでし／＼と呼び止めてそのハンカチを渡して下さるうとなさる。受取れば当然お礼を云わなければならぬ。お礼を云えば口を利いた事になつて、完全別火ではなくなる。へどもどした私は、何の意味か自分で後で考へても解らないのですが、突嗟に首と手を振つて楽屋へ逃げ込んでしまいました。別火は守れましたが、ハンカチを拾つて下さつた方には本当に失礼してしまいました。別火が生んだ滑稽談でございます。

編集後記

九月十四日午後二時より徳川美術館にて開催中の唐人相撲装飾展の席上、井上松次郎、佐藤卯三郎、河村丘造氏の唐人相撲の思ひ出を語る座談会が開かれました。

九月十四日田鍋惣太郎氏宅にて明治、大正、昭和の名古屋能楽会についての座談会が開かれ、之は戸田秀雄氏により名古屋能楽史として編輯され田鍋氏の新著『小鼓芸談』に集録されるさうです。

広報なごや一〇四号「郷土の人語り草」に西川初代三郎氏が能楽の西村大蔵氏と結びおどりに能楽を取入れ、狸々、羽衣、今様小鍛治、船弁慶、吉野天人、を新作したのが今日の西川のおどりが認められた初め云々とのつてあります。此件については高安先生より其後日談として西村大蔵氏が東京在住のシテ方家元より呼出しをうけられる、其技量を試されたと上で高安流後見となられるに至つたいきさは承りました。昔は芸事にかけては今よりはるかに六ヶ敷い事が多かつたと今更感じ入りました。

和泉流古老の記録と昔の思ひ出話を聞いたりして、それを皆様に聞いて頂き知つて頂きたいと九月二十日能楽会元老田鍋氏及西村氏を招いて、成けました、此録音の集成は整理の上誌上に発表の予定です。

山本権次郎氏九月廿六日逝去さる氏は幼名弘太郎と言ひ遊芸は伊勢門水先生に師事。出藍の誉高かりしとか。明治廿七年六月愛知県博物館内舞台披露に十五才にて三番叟をひらかる。こゝに謹んで哀悼の意を表す。

○楽師協議会よりのおしらせ
小鼓後藤孝一郎師取立にて小島陸一氏御披露。

十一月の予告

十一月十日	観世会	能松	シテ武田太加志	井上祐一
十一月十六日	松誦会	羽衣	シテ佐藤 岩雄	井上松次郎
十一月十七日	幸友会	柿山伏	富田 章夫 中野鈔三郎	井上松次郎
十一月二十三日	市橋 良治	狂言 芥川	井上礼之助	井上松次郎
十一月二十四日	武平	狂言 井 杭	佐藤卯三郎	石田 喜樹
十一月二十五日	大野 弘之	狂言 成上り	佐々木秀夫	井上礼之助
十一月二十五日	井上礼之助	能清 経	シテ加藤丈太郎	
		能蟬 丸	シテ観世 武雄	
		能紅葉狩	シテ河村 經二	
		狂言 清水	井上可	井上松次郎



花 甚

直売店 駅前豊田ビル一階 TEL 4587
 温室 千種区猪高町西一社 TEL (猪高)25
 東新町電停東 CBC放送局西隣
 TEL 0487・5296

狂言

十一月の動き

- 十一月十日 観世会
 - 能松 虫 シテ武田太加志 ワキ西村 欽也
 - 能井 筒 シテ梅若 六郎 ワキ西村 弘敬
 - 能大江山 シテ山本 博之 ワキ高安 滋郎
 - 狂言 千鳥 野村又三郎 河村 丘造
 - 井上松次郎
- 十一月十六日 松誦会
 - 能羽 衣 シテ佐藤 岩雄 ワキ高安 滋郎
 - 能巻 絹 シテ滝見 篤 ワキ西村 弘敬
 - 狂言 柿山伏 佐々木秀夫 中野鈿三郎
 - 十一月十七日 幸友会
 - 能菊 慈童 シテ八田常次郎 ワキ高安 滋郎
 - 能高 砂 シテ河村 鉦二 ワキ西村 弘敬
 - 狂言 芥川 井上礼之助
 - 市橋 良治
 - 十一月二十三日 鳳鳴会
 - 能班 女 シテ伊藤 良子 ワキ西村 弘敬
 - 佐藤 秀雄
 - 狂言 井 杭 佐藤卯三郎 石田 喜樹
 - 井上松次郎
 - 十一月二十四日 掬水会
 - 能土 蜘蛛 シテ伊藤 武平 ワキ西村 弘敬
 - 歌村 鴻一郎
 - 狂言 成上り 中野鈿三郎 大野 弘之
 - 佐々木秀夫
 - 十一月二十五日 掬水青陽会
 - 能清 経 シテ加藤丈太郎 ワキ西村 欽也
 - 能輝 丸 シテ観世 武雄 ワキ西村 弘敬
 - 河村 丘造
 - 能紅葉狩 シテ河村 鉦二 ワキ高安 滋郎
 - 能紅葉狩 シテ河村 鉦二 ワキ高安 滋郎
 - 狂言 清 水 井上礼之助 井上松次郎

「狂言解説」

千鳥 金払いの悪い主に使える太郎冠者が酒屋へ樽を取りにやられる、引替でなければ渡さぬと云ふ酒屋をだまそうと四苦八苦稚児流釣馬の真似をしたり、千鳥の真似をしてみせぬが……。

芥川 西宮詣のしようが手の男とテンバの男互に己の非をかくして同道する内芥川を渡るとしてテンバがばれる。手洗を使ふとしてテンバがしようが手をつめて喧嘩となるが、しようが手ではつかみ所もとれぬので……。

井杭 お目を下さる、お方が可愛がつて張らせられるに困つた井杭、清水の観世音に祈誓をかけかくれ頭巾を授かる。井杭の姿が見えぬので某は通りかゝつた占師を呼び入る。占師は井杭の居場所を当てるので驚ろいた井杭は算木をかくし兩人をなぶつてけんかになる……。

成上り 主と一緒に北野のお手洗へ参籠した太郎冠者少しまどろむ内にお太刀を青竹にすりかえられる、さあ大変之を何とかごまかさうと山の芋の鱧に成上つた話がかられるお太刀が青竹になり上つたとこぢつとてか叱られる。清水 野中の清水へ水を汲みに行くと云はれた太郎冠者秘蔵の桶をかくして清水に鬼が出たとかけこむ。主秘蔵の桶を取り返しに清水へ。太郎冠者は出もせぬ鬼になつて主を驚ろすが、鬼の声と太郎冠者の声の似ているのに気が付いた主の為の皮がはげける。

流派の起源と趣意

古書換 歌村 彦四郎

(古書換として本紙に掲載いたしますもの)

昭和32年11月1日発行
 発行所 名古屋市中区森町1-1
 井上重兵衛 電話3177
 名古屋狂言共同社同人
 印刷所 地上社 電話1190
 株式会社 地上社

は、家元の「秘伝聞書」の披露で、今日まで、すべて未公表のもの(あります)狂言の起源は、いろいろと究明されておりますが、総合して、能に先行して、大体吉野朝前後に形体が出来たようであり、狂言三流と申しますと、驚、大蔵、和泉であります、うちで驚流が最も古いように伝へられますが、流派として固定したのは大蔵流が最初のものであります、文化四年の家元業の聞書に。

一、狂言ノ、作者アキラカナラズ、其ノ内、イヅレノ狂言カ、玄恵法印ノ作モ有ト也、又狂言ヲ、ツトメハジメタルハ、大蔵ノ元祖トメタリ、狂言家ノ、一古キハ大蔵家トミエタリ、去ナガラ、狂言ヲ、趣向仕出シタルハ、大蔵ノ元祖ニテハアラズ、作人シレル也、尤、大蔵ノ元祖ノ作ノ狂言モ、有ベケレ共、早、狂言ト云モノ、出来テ有上ノ事ナレバ、趣向仕出シタルニハアラズ。

又、狂言ノ能を比較して左のように皮肉つてあります。

一、神君様ノ、思召ニ、イツハリ事、狂言ハ、真心ナリ、ト仰セラレタル事有ト也、又狂言ハ、ワラヒグサノ様ナレ共、皆人ノ意見ニ、ナルトモ仰セラレタルト也、イカサマ、能ハ、イツハリ事多ク、ナキ事ヲ作りテ、シタル物也、(中略)狂言ハスベテ、ランザツ、イヤシキワザヲ、スル様ナレ共、カハツテ、狂言ノ方、能ニハ、マサリテ上ヒン、オダヤカニ、イヤシカラズ、ナルホド、神君様ノ、思召ノ通、狂言ハ、真心也、狂言ノ、真心ノ意ハ、スベテトリツクロヒナク、アリノマ、ノ、物ナルニヨツテ、誠也、(中略)狂言ト云物ハ、ヨカシキ、ドンナ、フツ、カナ、タイモノナキ物シヤト以テ、ワラウ人モ、有ベシ、夫ハ、狂言ノ意ヲ、シラヌ人ノ云事也、ナルホド狂言ハ、フツ、カナ、タイモノナキ物ナレ共、夫ハ、シレタ事也、タイモノナイ事ハ勿論ノ事、夫ハ、ガテンデ、スル也、其、ヨカシクフツ、カニ、ドンナ、イヤシク、タイモノナキ事ハ、狂言ノ趣意、コノム所也。

狂言こぼれ話 第三回

長西村弘敬氏を招いて共同社同人が昔はなしを聞く会は九月二十日若宮八幡俱樂部で開催された。同席の談話は録音して同人で之を再聴の上編輯。其時の要点を誌す事とします。何分素人の編輯なので不十分な所も読みづらい所も多いと存じますか不慮。

1、共同社の結成

明治二十四年六月、名古屋狂言共同社は角淵宣、井上菊次郎、河村鉦三郎、三橋正太郎、伊勢門水(水野代二郎)等によつて結成、規約も出来て居たが、戦災の高焼失す。

共同社の全盛時代即ち黄金時代は、角淵宣、井上菊次郎、河村鉦三郎、水野門水の四名が揃つていた当時で、名古屋の他の役々、お囃子にも脇方にも之れだけのメンバーは揃つていなかった。だが何分にも本職で狂言師と云ふ人はなく、皆をれれ本職があるので社会的なレベルから気に入らぬと出演を嫌つたり、四人の役割でもめたり、して中々役割が決まらず、田鍋氏の談では狂言づけが役割が決まらず困つた事が多かったそう。結局河村鉦三郎氏の所で役付が決まる事が一番早かつた事である。四人が全部それぞれ一城の主の積りで居るために色々問題がおきたらしい。其後は一時人数が少くなり下り坂となり、名古屋で全部役を受けられない様な時代もあつた。しかし現在は昭和の時代と云ふか、全員が、和泉流の伝統を確実守り、一致して、狂言の発展に、全力を挙げて居る。殊に特筆すべきは東西の狂言各流とも交流をよくし、狂言の発展に名古屋共同社としての独自の立場を堅持している事では何と云へば、斯界の為喜ばしい限りである云はねばならぬ。

狂言は喜劇的な性格を持つておりますが一方又庶民的な芸術である云々するのでございます。当時の支配階級であるところの大名、これが狂言に現れますと応場というよりは、どこか間の抜けた性格になつております。これに反しまして家元の太郎冠者は、小利口な

三宅 藤九郎

性格の者が多いのであります。もつとも支配階級の人物でもそう一概には申せません。年貢を受取る役人、乃ちお賽者などは百姓から賄賂を取るというような悪質な人物が『佐渡狐』の狂言に仕組まれております。賄賂・取賄の關取引は現代の世の中だけの事ではなく遠く室町時代からも既にあつたものと見えます。今でも賄賂の事を袖の下などと云つておりますが狂言の佐渡狐でも役人に賄賂を渡す時に、『ハハハ……是は近頃寸志でござりまするが、どうぞお袖の下へお納めなされて下され』といつて、その所謂寸志を役人の袂の後に返して行くのです。乃ち昔の賄賂は本当に袖の下にそつと差出し、賄賂を取る方も袖の下からそつと懐の中へ忍ばせたものと見えます。狂言に現れる女をみますと、これはおそろしく氣の強い女が多いのであります。『髭櫓』という狂言では亭主の大髭が氣に喰わないといつて、途方もない大きな毛抜きを持ち出して、髭を抜こうとします。亭主は抜かせまいとして髭に仰々しく櫓を備えて防ぎますが、遂に抜かれてしまうという筋でこれは私の父野村萬齋が、今の陛下に天覧を賜つた事のある狂言でござります。

芝居の方でも先年歌舞伎座で、勘三郎・幸四郎・三津五郎さん達によつて上演されました。私に監督を承りました。

芝居と申せば狂言種のものも狂言形式で上演されましたのは、明治二十五年の十月、九代目團十郎が歌舞伎座で演つた『素袍落』が最初では無かろうかと思ひます。この時にも一つのお話がございます。当時私の父のころへ、知合いの人が見えて、『奈須与市の語りもある集會に演じて欲しいと頼みました。父は引受けまして、当日その場所へ行って見ますとお客はほんの二、三人、兎も角も奈須の語りを勤め終りました。するとその中の正客らしい人から是非違ひたいという事で違つて見ます。『自分は本を書く商売の者だが、素人弟子として狂言が習いたい』という訳。そこで師弟の約束をしますと早速翌日弟子入りに来られた。狂言の事をいろいろ聞かれるだけで、雑談で時を過ぎて稽古はしない。そして狂言の本を借りて行く。そんな事が度重りましたので、ハテ変なお弟子だなと思つてはいますと、間もなく歌舞伎座で福地櫻痴として、『素袍落那須の語り』というものが上演されて、それに奈須の与市の語りやちやんと取込んである。弟子入りをしたといつて狂言の本を借出した人は櫻痴居士その人であつたという訳です。ですからこの素袍落は私達の流儀和泉流から取つたものといえるのですが、歌舞伎の狂言種は、古いところでは殆ど全部が流儀の狂言によつてゐるようです。『釣狐』の狂言を芝居として、『こんくわい』という名前になり、狂言の『花子』を『身替座禪』というのも流儀の曲名をそのまま用いたものでござります。

「外堀新太郎（角淵宣）歌集」によつて能を歌によみしは古今の歌人の中にもいと少し。おのれが知れる中にては久我建通公、加藤安彦翁、大島為足大人とあれど二百番ことごとくを詠みしをいまだきかず、おのれもよみこゝろみたれと百番に満ちしのみなり。さるる歌人ならぬ角淵翁は和泉流狂言の名家にて謡は高安の奥を究められたればその狂言と謡との力もよみ出られたる歌二百首に余れり、されと世にあらはすものにあらずとて函の底深く秘められしに、ある時同じ道の友なる河村翁の眼にとまりしを河村翁またひそかにおのれに見せられぬ。さて読みもてゆくに謡の句より漢語詠語まで自由自在にのみ入れてその曲のころをよくよみこなされたる歌人も及ばぬし多くいと目出たてかくなむ。

おもしろき歌のことばにうかがふつゝ、扇手にとり舞はんとぞおもふ。

大正十三年十月吹けとも寒からぬ秋風の音をきつゝ、庭の白菊の花をながめて

浪音 尾崎忠功しるす

素より本歌をよむべき養養もなければ言葉も知らず本歌狂歌の区別もしらず謡の方は謡の文句そのものが歌の句の様にあれば夫をならべその種なものが出来たりしが狂言言葉は歌にもならずオドケの様なものも出来……と云う。つきの外堀先生の自作の歌を御紹介しませう。

一松 虫
虫の音に 友をしのばん あべの原
月のよすがら 酒をたぐえて

一井 筒
ついでつ 井筒によりし 水鏡
むかしの影ぞ 在原の寺

一干 鳥
浜千鳥 伏する手振りも 面白く
祭りの酒を たばかりて行く

編集後記

十月八日 新城富永神社奉納に河村丘造、佐藤秀雄、井上礼之助の三氏は能三番狂言六番を地元狂言同好会の人々と出勤し盛況裏に終演した。

十月二十一日 豊川閣樂舞殿舞台披に井上松次郎、井上礼之助、佐藤卯三郎、河村丘造諸氏奉納狂言に出演。

○楽師協議会よりおしらせ

十月十三日浅井宗親氏（觀世喜之社中）能弱法師のシテを荒川清氏（金森準三社中）能萬城の笛を抜く

十月十九日垣村重一氏垣村節子氏丸橋勝利氏（永田虎之助社中）は囃子で大鼓を大野美津子さん（青木恒治社中）は囃子で小鼓を織田節子さん（柴田収社中）は囃子でシテを抜く

十月廿日伊吹総一郎氏伊吹洋一郎氏見王江海氏（鬼頭八郎社中）は囃子で太鼓を抜く

十二月一日 清風社
熊野 栗本 光子 ワキ高安 滋郎
熊景 清 森川 如春 ワキ西村 弘敬

十二月八日 宝生定式能
狂言 観ない 井上松次郎 河村 丘造
能班 女 辰巳 孝 ワキ 佐藤卯三郎

能小鍛治 市内藤 泰二 ワキ 市岡 良治
狂言 薩摩守 佐藤 秀雄
河村 丘造

何と云つても お茶は升半

創業天保十二年 升半茶店

狂言

十二月の動き

十二月一日 清風社

熊野 シテ栗本光子 ワキ高安滋郎
 龍景 シテ森川如春 ワキ西村弘敬
 狂言 細ない 井上松次郎 河村丘造
 佐藤卯三郎

十二月八日 宝生定式能

龍班 女 シテ辰巳 孝 ワキ西村弘敬
 井上松次郎
 龍小鍛冶 シテ内藤泰二 ワキ高安滋郎
 市橋良治
 狂言 薩摩守 佐藤友彦 河村丘造
 佐藤秀雄

「狂言解説」

縄ない ばくちの好きな主の為に隣屋敷へ奉公させられる太郎冠者、テコでも働らかぬ不貞くされの態度に隣の主人が約束がちがうと戻され、主が縄なへと云付けると縄の端を主に持たせてとなり内話の話。つい身が入りすぎて後の主が隣の主人と入替つたを知らず仕方話で振替つてさあ大変……。

兎に角にたばかれても我主を

思ふは臣が心ならめや
 薩摩守 天王寺へ参る出家。神崎川の渡しに舟賃をとる由茶屋で聞き、舟賃なしで渡る秀句を茶屋で教えられ、平家の侍の心薩摩までは出たが薩摩守の心が出ずついに面目も無い仕儀となる。

聞きのこと一句はおしき渡し守

神崎川の水に流され

狂言の勤め方と心得

歌村彦四郎

(古書檢として本紙に掲載いたしますものは、家元の「秘伝聞書」よりの抜萃で、今日まで、すべての未公表のものであります)「秘書狂言趣意」のうちに、狂言の勤め方、心得をいろ／＼と説いております、之は狂言方だけでなく、シテ方にも通用することと思ひます。

一、狂言、是ハ古躰、是ハ近躰ト、二段ニ、ワケテ、シカルベシ、三段ニモ、ワカレルカ、鬼瓦杯ハ、タトヘバ、古躰カ、佐渡狐杯ハ、近躰也、先多ク古躰也、右ノ趣ニ、ワケテスレバ、心ニスハリ、アル故ニ、勤ヨキ也、柿山伏杯ハ、殊ノ外ノ狂言、古躰也、釣狐、花子ハ、今スル、近躰シカルベシ、此兩番モ、古躰ハ矢張、狂ナレ共、是ハ、狂ハ、面白カラズ、近躰ノ仕様ヨシ。一、スベテ、狂言、シマラス様ニ、花ヤカニスルギ吉、スベテ文句ヲ、口ニテ、云ベカラス、氣ヨリ、ハツベシ文句ナレバ、其気々々ニナリテカハ云ベシ、見ル事ナラバ、見テカラ思フベシ、聞事ナラバ、聞テカラ思フベシ、狂言語モ、右ニ同ジ、カタクナキ様ニ語ベシ、スベテ今日、常ノ事ニテ、ワキマヘ、其気々々ニ、ナル事ヲ、シルベシ、又仕舞狂言ハ、シマタルガ吉、併、ワキ方ハ、常ノ狂言ノ心持ニテ、狂ニスベシ、所ニヨリ、能ノ脇方ノモツタイクサキ、味ノ所ヲ、謡ノコトバ如ク、真顔ニテ、其真似ヲスルモ、狂言、深ク面白ク有ベシ、右ハ実ノ真似ニハアラズ、狂言ノ有ノ真似、タクミノナキ所也、又シテノ方ハ、謡モ業モ、立派ニ見事ニスベシ、是仕

昭和二年十二月一日発行
 発行所
 名古屋市中区夜門前町1ノ1
 井上重兵衛方 電話5177
 名古屋狂言共同社同人
 印刷所
 株式会社 地上社 電話1190

狂言二ほれ話

三宅藤九郎

舞狂言ノ、心得也、仕舞狂言ハ、能ヨリモ、立派ニスベシ 左ナクテハ、スベカラズ。
 一、狂言アト、仕様ノ心得ハ、シテノ相手ノ事ナレバ、シテノ位ニアシラヒ、シテノヨリハ、扣ヘメニシ、シテヲ、引立ル様ニスベキ物也、己ガ、カハアルトモ、モチカタハ捨、シテヲ、タスケスベシ、又シテ不調法等有時ハ、イカ様トモ、シテヲ、タスケ、カヘツテ、首尾ニナル様ニ、術ヲツクスベシ、全躰、アトノ勤向ハ、功者ニナクテハ、不整也、并、能間、又ハ、応答等、勤方、大方狂言、アトノ勤方ニ、准ズベシ。

九代目團十郎という人は非常に芸術意慾の旺盛な人であつたと見えて、驚流の矢田蕙哉という人から狂言迄も習つていたのであります。前にお話致しました狂言の釣狐などという大物も習得したものですから余程熱心に稽古したものでございましょう。五代目菊五郎が「土朝」を初めてやりました時、團十郎はその間狂言を勤めたそうですが、その時の評判に、……ちよつとした所作を除くの外は、少しも歌舞伎役者とは見えず、故人驚流太郎の佛がそつくりありて、お懐しうござりました。……と評されている程です。この驚流太郎というのは驚流の家元で、團十郎はその寛太郎の風を真似ていたものと見えます。團十郎親方が稽古をしているからというので、市川一門の新蔵・染五郎・猿蔵などの人達も驚つて狂言の稽古を始めました。中でも新蔵が一番上手だつたという事を当時の染五郎即ち先代の幸四郎さんから伺つた事がございまして、そしてこれら俳優達が矢田蕙哉の「週忌」には追善狂言会を催しました。新蔵が「小傘」染五郎が「不聞坐頭」、猿蔵が「猿蔵」を演りました。当代の美人面の巨匠清水方先生もこの時錦木健一の名で「奇装練」という狂言を出しておられます。清水方先生も俳優達と一緒に狂言

を稽古されたのだらうでございまして。團十郎はこの会には出演はしなかつたようですが、蕙哉を追悼する句に、
 初嵐借しくも驚の行衛かな
 と詠んでおります。此の日の余興の一つに中節がありまして、狂言から取つた「鉢叩」といふのが新曲の肩書で出されておられますが、この催しのために特に作られたのではなうかとも想像しておられます。そして蕙哉を記念する石碑が、この弟子達によつて向島の百花園の中に建てられて今でも残つておりますが、その碑面に弟子の一人であつた俳人其角堂一さんの筆で、
 花暮れぬ我れも帰りを急がうする
 と記されております。これは実は蕙哉の辞世でありまして、句の終りの「帰りを急がうする」などは、いかにも驚流の狂言師の句らしく感じられます。その後近年になつて驚流最後の家元である驚流之孫の孫が私のところに弟子入りして参りましたが、病死致しまして完全に血統も絶えてしまいました。

この驚流には他の流儀に無い狂言や小舞がありました、現在私達が「木六駄」という狂言の中に入れて演つております「うづら舞」という小舞も其角堂機一さんの存命の時分、私が習つておいたものでございます。
 先年菊五郎劇団で「唐相撲」というのを上演致しましたが、これも狂言「唐人相撲」古川久さんが書直されたものでございます。この唐人相撲という狂言は唐人装束が沢山入るのでありまして、名古屋の徳川美術館には重要美術品級の立派なものが揃つてあります。それはその古く豊臣秀吉が朝鮮征伐をした時の戦利品の裂地で作つたもので、誠に豪華な装束でございまして、これを一昨年、特に拝借致しました。産経会館の開館祝の時、唐人相撲を出しました。何しろ桃山時代の品ですから、生地も相当に弱つてゐるものもあつて、塵物に触るように着たり脱いだりしておりました。この唐人相撲という狂言は、日本の相撲取りと大勢の唐人が相撲を取り、唐人が何人かかつても叶わない、遂に負けてしまふという筋で、大勢の唐人が前の者の着物を両手に持つ

て首を下げてたま、胴と胴を合せて百足のよう
な形で進む処があります。ところがこの徳川
家の装束を拝借して演りました時、大勢つな
がつて行くうち真中辺の者の着物がピリツと
破けました。由緒ある装束だ、しかも借物だ
という事が頭に泌み込んでいたので、後から
両手を添えていた者が思わず、ハツとして手
を離しますと、百足の胴は真中から中断され
てしまいました。百足の足は五十足ずつにな
ってしまつたという訳です。私も帝王の役で
出ている冷汗をかきました。

冷汗といえはまだまだあります。今上陛下が皇
太子様の時分、学習院の講堂で狂言の「観猿
」をお目にかけた事がございました。猿は小
さい子供で面をつけています。猿曳きの私が
この猿を先に立てて「さあ、行け」と
舞台へ出て行きますと、猿は方角を間違えて
後に置いてあつたピアノの中にもぐり込んで
しまいました。猿には綱をつけてあるので、
それを引つ張ると猿は何んと思つたか、今度
はピアノの廻りをくるく廻る。綱はピアノ
に巻きつく、見物は笑う。高貴の方が見てお
られるだけ冷汗たら〜でございました。こ
ういう時、猿曳きの役が心得のある人ですと
何んとかボロを出さない様な当意即妙のやり
方をするのでしょうか、未だ年若かつた私は
たゞ慌てるばかりで、咄嗟の処置など考える
心の余裕などありませんでした。

当意即妙という事で思い出しますのは父の
事でございます。父の最後の舞台は『弓矢太
郎』という狂言で、この時、父は下胸骨痛と
いう病に胃され、顎の辺に腫物がありまし
た。父の役は鬼の面をかぶつて鬼頭巾を着て
出たのですが、舞台で一旦それを脱いで、又
着直して、鬼の形になつて参詣人をおどす
という時に、どうしても鬼頭巾の紐が顎に触つ
て痛くて結ばず、鬼の面も、顎の辺の腫物に
さわります。そこで上に着ていた装束を顔の
後に高々と持ち上げて、素顔がむき出しにな
らないようにしまして、「捕つてかまう」と
云いながらその儘皆を追込みました。「そり

や鬼が出た」といつて振り向いて逃げた参詣
の役の者達も楽屋へ入るまで鬼の面をかぶつ
ていない事に気がつかなくなつたのでありま
す。これなどは咄嗟の機転で、芸に余裕があ
ればこうしたよい智慧も浮ぶものでございま
す。 終り

一月予告

- 一月十二日 学生 能
- 狂言 口真似 高山 進 松尾知明
- 膏菓煉 加藤欽造 板倉保臣
- 狂言 小舞とらまだら 高山 進
- 蟹山伏 富田 章夫 佐々木秀夫
- 能田 村 前田 茂徳 金田 征孝
- 市橋 良治
- (二部)
- 能羽衣 内藤 泰二
- 狂言 因幡堂 井上礼之助 野村又三郎
- 能土蜘蛛 シテ河村 鉦二
- 一月十五日 清 韻 会
- 能鉢ノ木 シテ大岩 一 務 高安滋郎
- 井上松次郎
- 二階堂河村丘造
- 能菊慈童 シテ栗木勝太郎
- 狂言 三人長者 井上祐一 佐藤友彦
- 井上義次
- 一月十九日 宝 生 会
- 能鶴 龜 シテ鈴木 右門 西村弘敬
- 能 上 シテ宝生 九郎 高安滋郎
- 井上礼之助
- 狂言 餅 酒 佐藤卯三郎 井上松次郎
- 河村 丘造

樂師協議会よりおしらせ

十月二十日 河井美代子氏東松泰久氏(竹市
秀雄社中)は囃子でシテを抜く
十一月二日 高田さだ氏須江恒子氏竹内照氏
宮下滋 (有賀滋子社中)は囃子でシテを

抜く
十一月三日 鈴木義久氏堀江昌氏(内藤泰二
社中)は囃子でシテを抜く
十一月十六日 坂野登氏(寛三男社中)は囃
子で笛を抜く
十一月十七日 荒井静江氏(福井啓次郎社中)
は能、菊慈童の小鼓を吉田俊彦氏(福井啓次
郎社中)は囃子で小鼓を抜く
十一月二十四日 北村勇夫氏(柴田初太郎社
中)は囃子でシテを抜く
全日 伊藤武平氏(柴田収社中)は能土蜘蛛
のシテを大曾根俊治(柴田収社中)は囃子で
シテを抜く

〔編集後記〕

昭和三十二年を終るに当り皆様の御支援によ
つて早十一号を数えるに至りました、このさ
やかなパンフレットが意外の反響を生んで
御声援やら御希望やらぞくぞく頂きましたこ
と同人としてこれにすぎない喜びはありませ
ん、こゝに誌上をかりてスポンサーの方々初
め皆様にお礼申述べます。
来春も又皆様の御伴侶となりますよう同人一
同努力を重ねる事をお約束します。皆様のよ
りよいお年をお迎え下さいますようにお祈り
申上げて年末の御挨拶とします。

十一月二十三日能楽を重要無形文化財として
指定される事となり先づ第一回として四十余
名が指定されましたが誠に東京本意で申請さ
れている。当地としても適格者として推選す
べき人が一人や二人はあるはずであるのに名
古屋はどこまでも田舎者として取扱はれてい
ると思はれるのはひがめだらうか?
田鍋氏表彰さる
名古屋能楽界の元老、田鍋惣太郎氏は、今回
県教育委員会より、多年の功績により其の徳
を、表彰されました。誠に宜なること存じ
ますが、我々も大いにお喜びを申上ぐる次第
であります。

ふじや
河文

電話代表 〇一三八一番
トヨダビル地下二階店
電話 〇〇一六八番
〇〇二五八番

くま
船津屋

電話代表 一八八〇番